西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集

上宮（うえみや）第3遺跡

平成4年度上宮配水池建設事業に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書

1993・3

宮崎県・西都市教育委員会

序

西都市には全国的にも有名な特別史跡・西都原古墳群をはじめ茶臼原・三納・三財古墳群など現在650基余の古墳が点在し、また、奈良時代に置かれた日向国府（推定）や日向国分寺・同尼寺跡も保存され、さらに、市内の各所からは縄文時代や弥生時代の遺跡が発見されています。これらのことは、古くから政治・文化の中心地として栄えていたことを物語っており、古代史解明の重要な地位を占めています。

しかし、近年の諸開発によって失われていく遺跡も少なくなく、埋蔵文化財の保護行政を一層充実していかなければならない時期にきております。

本書は、市水道課の委託を受けて実施した、平成４年度上宮配水池建設工事に伴う発掘調査の結果報告であります。

調査の結果、三宅神社に関連があると思われる平安時代末期～中世期前半の溝状遺構をはじめ多量の土師器が混入された土坑が検出され、また、西都市でははじめての柱列（柵列）状遺構が検出されるなど、貴重な資料を得ることができました。

この報告書が、学術研究の資料としてだけでなく、郷土を理解するための資料として、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識が得られれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご協力いただいた市水道課をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に衷心より厚く御礼を申し上げます。

平成５年３月25日

西都市教育委員会

教育長　平　野　　平

例　　言

1．本書は、市水道課の上宮配水池建設事業に伴い、平成４年度に実施した上宮第３遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、市水道課の依頼を受けて、西都市教育委員会が実施した。

3．調査組織は、次のとおりである。

調査主体　西都市教育委員会

教育長　平野　平

社会教育課長　三輪公洋

同文化財係長　伊達博敏

調査員　日高正晴（西都原古墳研究所長）

蓑方政幾（社会教育課主事）

調査作業員　篠原時江・黒木トシ子・緒方タケ子・長谷川クミエ

萩原秋子・佐伯民孝・杉田ヨシ・横山ヨシ

椎葉智佐子

椎葉重満

整理作業員　福田頼子

4．遺物の実測・トレース・図面の作成は福田・蓑方が行った。

5．本書の執筆はＶ・まとめを日高が担当し、その他の執筆及び編集は蓑方が行った。

6．本書に示す方位は磁北である。

7．土層・土器の色調は農林省水産技術会議事務局監修の標準土色帖による。

8．本調査による出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保管し、展示される。

本 文 目 次

Ⅰ．調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ．調査の概要 …… 2
Ⅳ．遺構と遺物 …… 9
（1）弥生時代の遺構と遺物 …… 9
（2）古墳時代の遺構と遺物 …… 11
（3）古墳時代以降の遺構と遺物 …… 13
（4）時代不明の遺構 …… 28
Ⅴ．まとめ …… 33

挿 図 目 次

第1図　遺跡位置図 ……
第2図　基本土層図 …… 3
第3図　遺跡周辺図 …… 5～6
第4図　遺構分布図（アカホヤ火山灰層面） …… 7～8
第5図　住居跡実測図 …… 9
第6図　住居跡出土遺物実測図 …… 10
第7図　弥生土器実測図 …… 10
第8図　出土遺物実測図・拓影（須恵器） …… 11
第9図　出土遺物実測図・拓影（須恵器） …… 12
第10図　1号土坑実測図 …… 13
第11図　1号土坑出土遺物実測図 …… 15
第12図　1号土坑出土遺物実測図 …… 16
第13図　1号・2号土坑出土遺物実測図・拓影 …… 17
第14図　2号土坑実測図 …… 18
第15図　溝状遺構土層図 …… 21

第16図　1号～3号溝状遺構出土遺物実測図・拓影 …… 23
第17図　4号・5号溝状遺構出土遺物実測図 …… 24
第18図　1号掘立柱建物跡実測図 …… 25
第19図　2号掘立柱建物跡実測図 …… 26
第20図　1号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 26
第21図　柱穴（ピット）出土遺物実測図・拓影 …… 27
第22図　出土遺物実測図 …… 28

表　目　次

表1　土師器観察表 …… 29

図 版 目 次

図版1　上宮第3遺跡近景・南側遺構分布状況・1号～3号土杭検出状況 …… 37
図版2　1号～8号溝状遺構及び土層検出状況・北側遺構分布状況 …… 38
図版3　9号・10号溝状遺構検出状況・弥生時代住居出土状況など …… 39
図版4　出土遺物 …… 40
図版5　出土遺物 …… 41
図版6　出土遺物 …… 42
図版7　出土遺物 …… 43

遺跡番号	遺　跡　名	遺跡番号	遺　跡　名	遺跡番号	遺　跡　名
１００１	西都原古墳群	１０１１	上　宮　古　墳	１０２１	童子丸遺跡
１００２	清水西原古墳群	１０１２	上　宮　城　跡	1022～102	上　園　古　墳
１００３	上ノ原遺跡	１０１３	三　宅　城　跡	１０２５	石　貫　遺　跡
１００４	寺　山　遺　跡	１０１４	諏　訪　遺　跡	１０２６	原　口　遺　跡
１００５	清　水　遺　跡	１０１５	酒　元　遺　跡	１０２７	寺　原　遺　跡
１００６	下尾筋遺跡	１０１６	堂ケ島遺跡	１０２８	丸　山　遺　跡
１００７	上尾筋遺跡	１０１７	寺　崎　遺　跡	１０２９	西都原遺跡
１００８	日向国分寺跡	１０１８	上　妻　遺　跡	３００１	松本塚古墳
１００９	国　分　遺　跡	１０１９	経　　塚	３００２	松　本　遺　跡
１０１０	上　宮　遺　跡	１０２０	法　元　遺　跡	３００８	三納古墳群

第１図　遺跡位置図

Ⅰ．調査に至る経緯

西都市水道課では、上宮地区の上水道改良に伴い配水池（Ｐ．Ｃタンク）を建設する計画がなされたが、建設地が西都原であることから西都原協議会で協議されることとなった。

それは、西都原の風致保存については、宮崎県知事・宮崎県教育長・西都市長・西都市教育長の４者で確認（確認書）されており、この確認書の第４項に「西都原に関して定期的に又は必要に応じて関係機関の協議会を開き意見の統一をはかる」とあり、西都原に関したことについてはこの協議会（西都原協議会）の意見の統一によって進められていることから、行われたものである。

当初は西都原運動公園の北側に計画がなされたが、西都原運動公園の北側一帯は現在のところ開発が進んでいない地域であることから、建設地の変更をお願いし、再度協議することとなった。

このようなことから、水道課では建設地を再度検討した結果、西都原運動公園の南側で、すでに開発が進んでいるところに計画変更がなされた。

これを西都原協議会で再協議の結果、同地はすでに開発が進んでいる地域でもあることから、周りに樹木を植栽しなるべく見えないようにすること、また、三宅神社の隣接地で周辺には古墳が点在する周知の埋蔵文化財包蔵地でもあることから事前調査が必要であるなどの意見の統一をみて、事業が実施されることとなった。

調査は、担当課の水道課から依頼を西都市教育委員会が受け、建設地2,025㎡全面の発掘調査を実施し、平成４年８月10日に着手、同年11月９日に終了した。

Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境

西都市は、宮崎県のほぼ中央部に位置する内陸都市で、地形としては西方に九州山地を背負った形容を表し、その九州山地から岬様に南東へ、東へと幾条にも台地が延びている。また、市街地を中心とする平野部の東端を南流する一ツ瀬川及び支流の三財川・三納川等が沖積地を潤し、豊かな農地が形成されている。

本遺跡は、この幾条にも延びた台地のうち、西都平野に向かって南南東に延びた西都原台地南端に位置している。この西都原台地には全国的に周知される特別史跡・西都原古墳群（柄鏡式を含む前方後円墳30基・方墳１基・円墳278基）が群在し、中央部には特別史跡309基には含まれない男狭穂塚と女狭穂塚古墳（明治28年12月４日宮内庁陵墓参考地として治定）２基の巨大古墳が偉容を誇っている。男狭穂塚は全長217㍍・高さ18㍍、女狭穂塚は全長174㍍・高さ15㍍の九州随一の規模を誇る前方後円墳で、10.5㌶の静粛な照葉樹林に囲まれた森に保存されている。

ところで、本遺跡の東側に隣接して三宅神社が存在している。この三宅神社は平安時代末期には存在したと推定される神社で、しかも西都原台地上に立地し、天孫瓊々杵尊が祭神であることからも日向地方において崇拝厚い神社であったと思われます。古記録によると一年を通じて大・中・小の祭事が行われ、97回にも及んでいたことが記され、特に６月夏至の日の天孫降臨祭・８月15日の国家安穏祭・10月１日と11月初卯の日の山陵祭が同神社の三大祭とされていた。このなかで、山陵祭は西都原の男狭穂塚を対象にした祭事で、古くは可愛塚神社（現在可愛塚神社跡が男狭穂塚の基台上に残っている）で催されていたものであるが、現在でも西都原古墳祭として継承されている。

なお、三宅神社の北側に隣接して上宮遺跡が存在するが、同遺跡からは14条の溝状遺構及び長方形土坑が確認されている。これらの遺構は、三宅神社に関連のあるものと推定され、神社域にも含まれていることからも注目される。

また、本遺跡の南西0.23㌔には上宮城跡、北北東0.38㌔には三宅城跡２つの中世の城跡が所在し、さらに、同台地南側中間台地には奈良時代に建立された一国一寺の日向国分寺跡等が保存されていることからも、本遺跡を含む周辺地域は歴史的にも価値の高いところである。

Ⅲ．調査の概要

調査は対象地の全面が造成され、中央に配水池、その他はコンクリートで舗装されることから全面の発掘調査を実施した。

まず、簡単な試掘調査を行った結果、アカホヤ火山灰層が残存していたのが確認されたので、その結果をもとに重機により表土及び黒色土を剥ぎ、アカホヤ層面での本格的な調査を実施した。また、ほぼ東西南北に10m方のグリットを設定し、遺構・遺物の確認を行った。

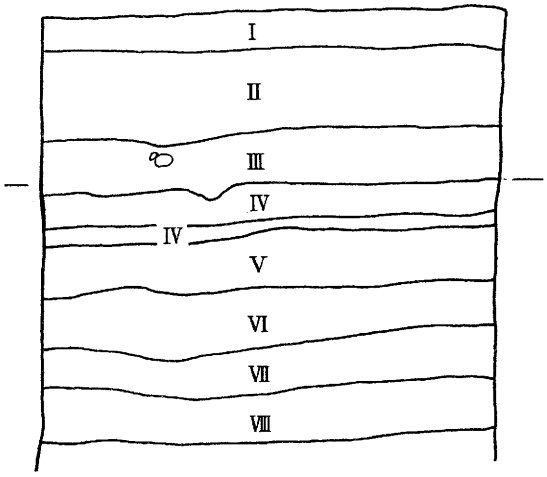
最後に、アカホヤ火山灰下層の縄文時代及び旧石器時代の文化層（遺構・遺物）の確認のためのトレンチを各所に設定し調査を行ったが、アカホヤ火山灰層下層からは遺構・遺物は検出されず、この時点で文化層はないものと判断し、調査を終了した。

調査の結果、最も古い時代の遺構として弥生時代後期の住居跡１軒、そして、平安時代末期から近代までの溝状遺構10条・土師器坏などが多量に出土した土坑など土坑10基、さらに、掘立柱建物跡２軒や柱列（柵列）状の遺構を含む約850個ものピットが確認されました。

遺物は住居跡から弥生土器、１号土坑から多量の坏及び高台付碗などの土師器をはじめ県内では類例がない高台のついた鉢形の内黒土器、そして、溝状遺構からはその時代を反映する土師器・須恵器・青磁などが出土しました。

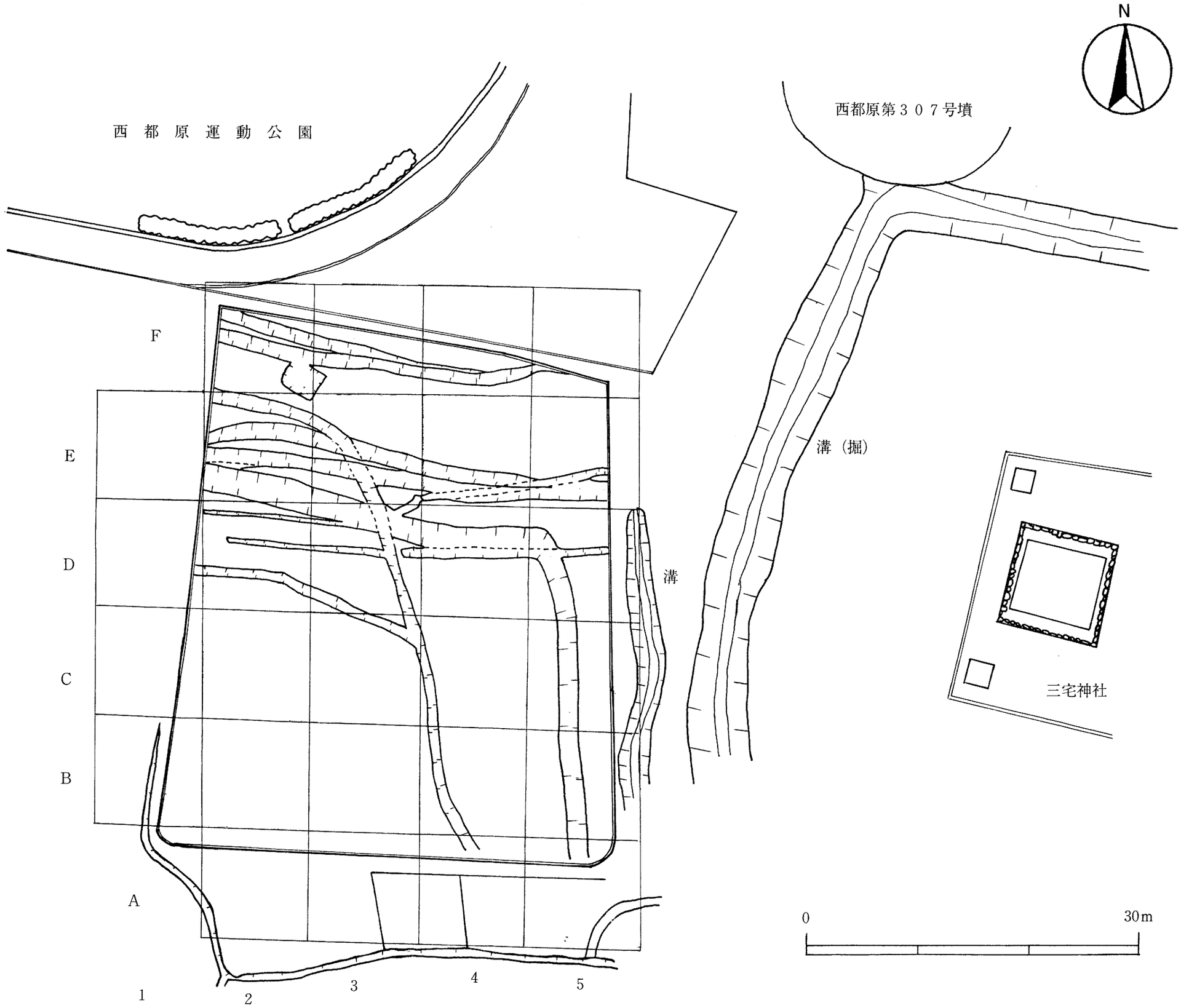
これらの詳細については後述するとして、三宅神社に関連のあると推定される溝状遺構や多量の土師器が出土した土坑が検出されたこと、また、西都でははじめての柱列（柵列）状遺構などが検出されたことは大きな成果である。

なお、本遺跡の基本土層は第Ⅰ層が表土（耕作土）、第Ⅱ層が腐食土、第Ⅲ層が黒色土、第Ⅳがアカホヤ火山灰層、第Ⅴ層が黒褐色土、第Ⅵ層が暗褐色土、第Ⅶ層が褐色土、第Ⅷ層が黄褐色土（第２オレンジ層）となっている。



Ⅰ　表土（耕作土）
Ⅱ　腐食土
Ⅲ　黒色土
Ⅳ　明黄褐色土（Hue10YR6／6）
　　アカホヤ火山灰層
Ⅳ　黒褐色土（黄褐色）（Hue10YR2／2）
　　アカホヤ火山灰下層・粒子が荒い
Ⅴ　黒褐色土（Hue10YR2／2）やや硬質
Ⅵ　暗褐色土（Hue10YR3／3）硬質
Ⅶ　褐色土（Hue10YR4／4）硬質
Ⅷ　黄褐色土（Hue10YR5／6）
　　赤色・黄色などのあらい粒子が多量混入

第２図　基本土層図



第３図　遺跡周辺図

N
6号溝状遺構
3号溝状遺構
4号土坑
2号溝状遺構
F
3号土坑
7号溝状遺構
B
9号土坑
2号土坑
2号掘立柱建物跡
C
1号掘立柱建物跡
A
1号溝状遺構
8号土坑
8号
溝状遺構
E
4号
溝状
遺構
5号
溝状
遺構
10号
溝状遺構
住居跡
D
1号土坑
7号土坑
6号土坑
10号土坑
5号土坑
1号
5号
4号
2号
9号溝状遺構
0
10m

第4図　遺構分布図

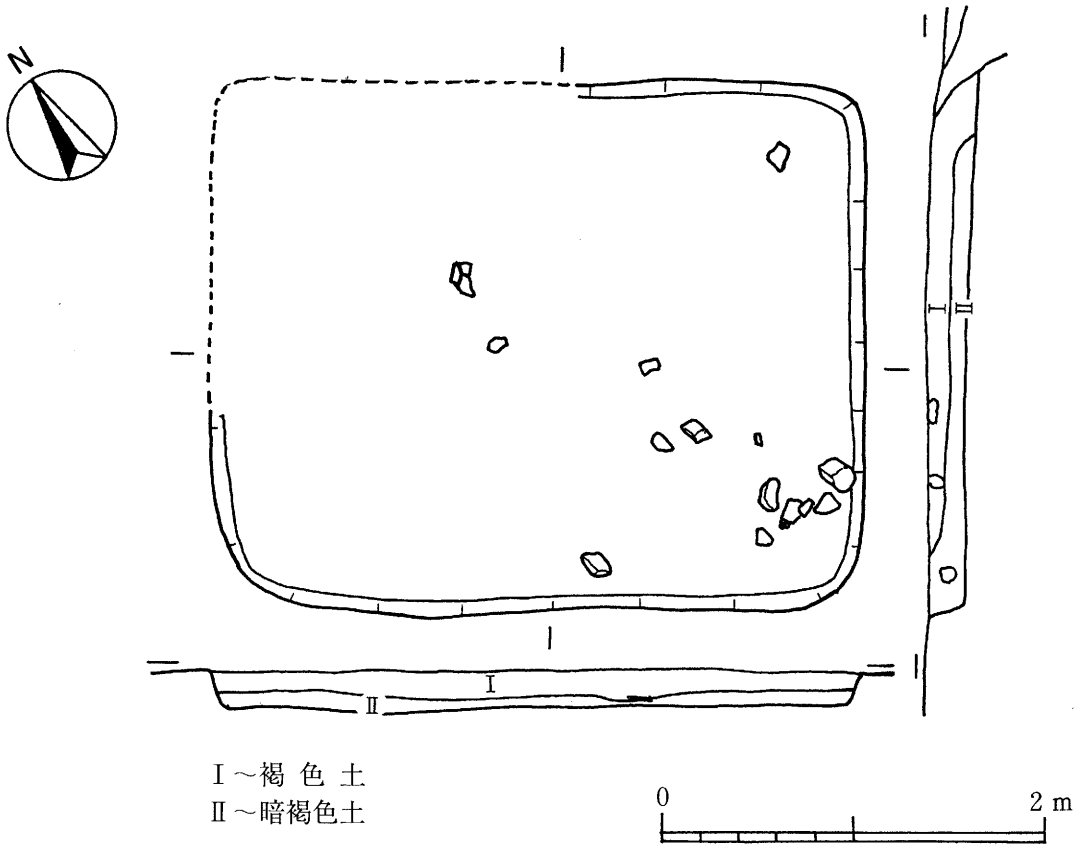
Ⅳ．遺構と遺物

1．弥生時代の遺構と遺物

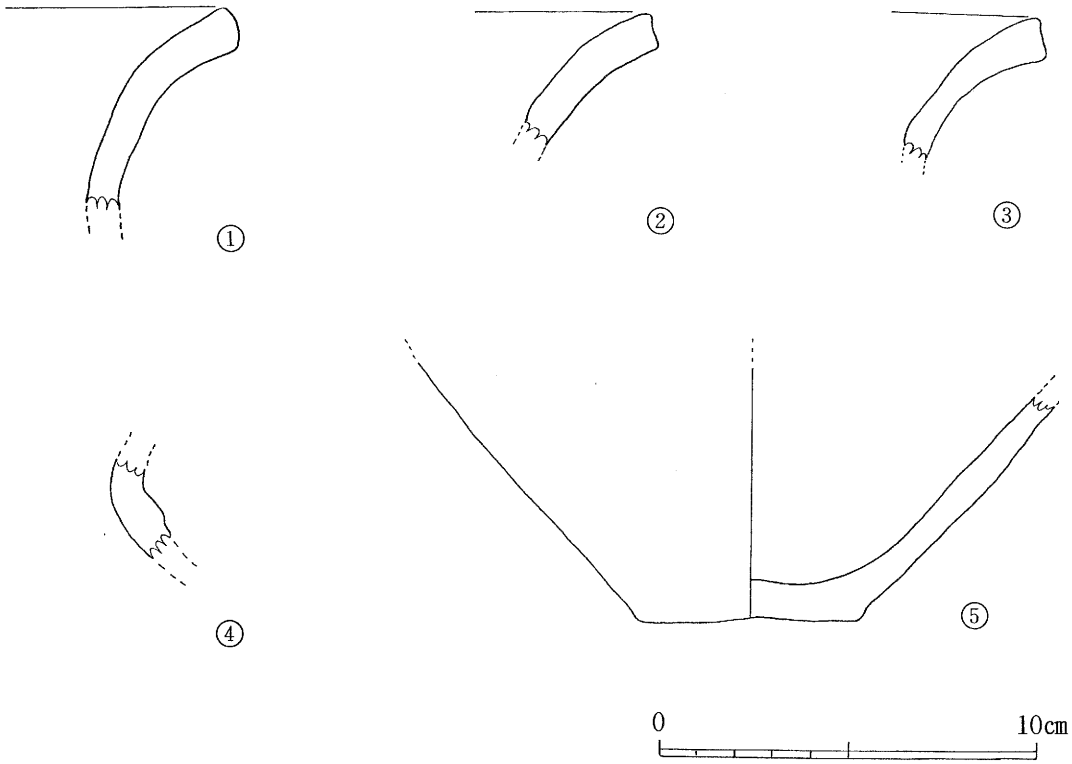
（1）住居跡（第5図・6図）

〈遺構〉　住居跡は調査地の北西部F－2グリットから1軒検出されている。方形状プランの竪穴式住居跡であるが、北西隅を7号溝状遺構と切り合っており、削平されている。長軸3.42㍍・短軸2.8㍍の規模を有する。床面は平坦的で、径が30㌢前後・深さ15～51㌢の円形柱穴が4個検出されているが、主柱は中央部位置する2本と思われる。壁面は約70度で立ち上がり、壁高は20㌢を計る。

〈遺物〉　弥生土器約30点が出土しているが、そのほとんどが甕形土器である。1・2は口縁部が「く」字状に外反した甕形土器で、胎土はあらく、調整はヨコナデ調整である。3は口縁端部が水平を呈した壺形土器の口縁部、4は頸部に突帯を施した壺形土器で、胎土はあらく、調整はヨコナデ調整である。5は甕形土器の底部で、底径 6.0㌢を計る。胎土はあらい。



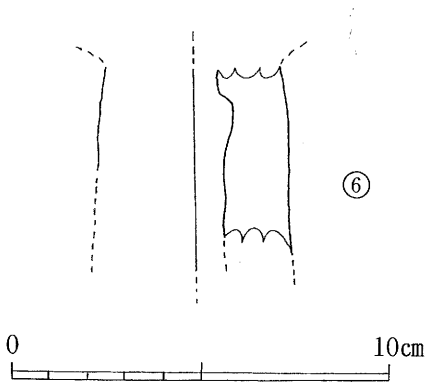
第5図　1号住居跡実測図



第６図　住居跡出土遺物実測図

その他の遺物

４号溝状遺構から高坏形土器の脚部が出土している。脚部が垂直に延びるタイプのもので、胎土はあらく、ヘラで面取りした後ナデ調整が施されている。



第７図　弥生土器実測図

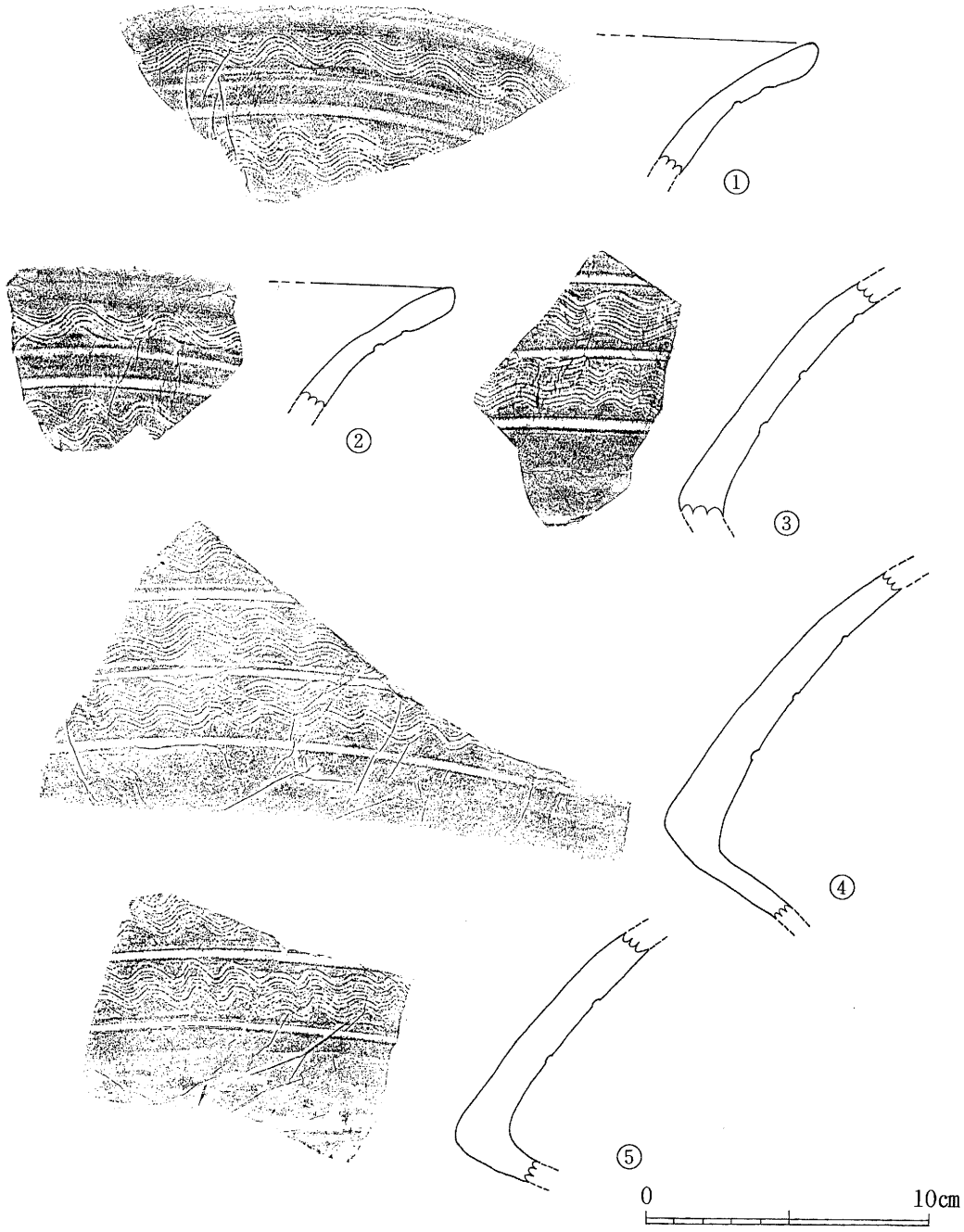
２．古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に比定される須恵器が１号・２号・３号溝状遺構などから出土しているが、これらの溝状遺構は出土遺物から平安時代末期～中世期前半と推定されることから、同遺構に混入したものと思われる。しかし、隣接地には円墳が位置していることから、周辺地域に遺構の存在が想定される。

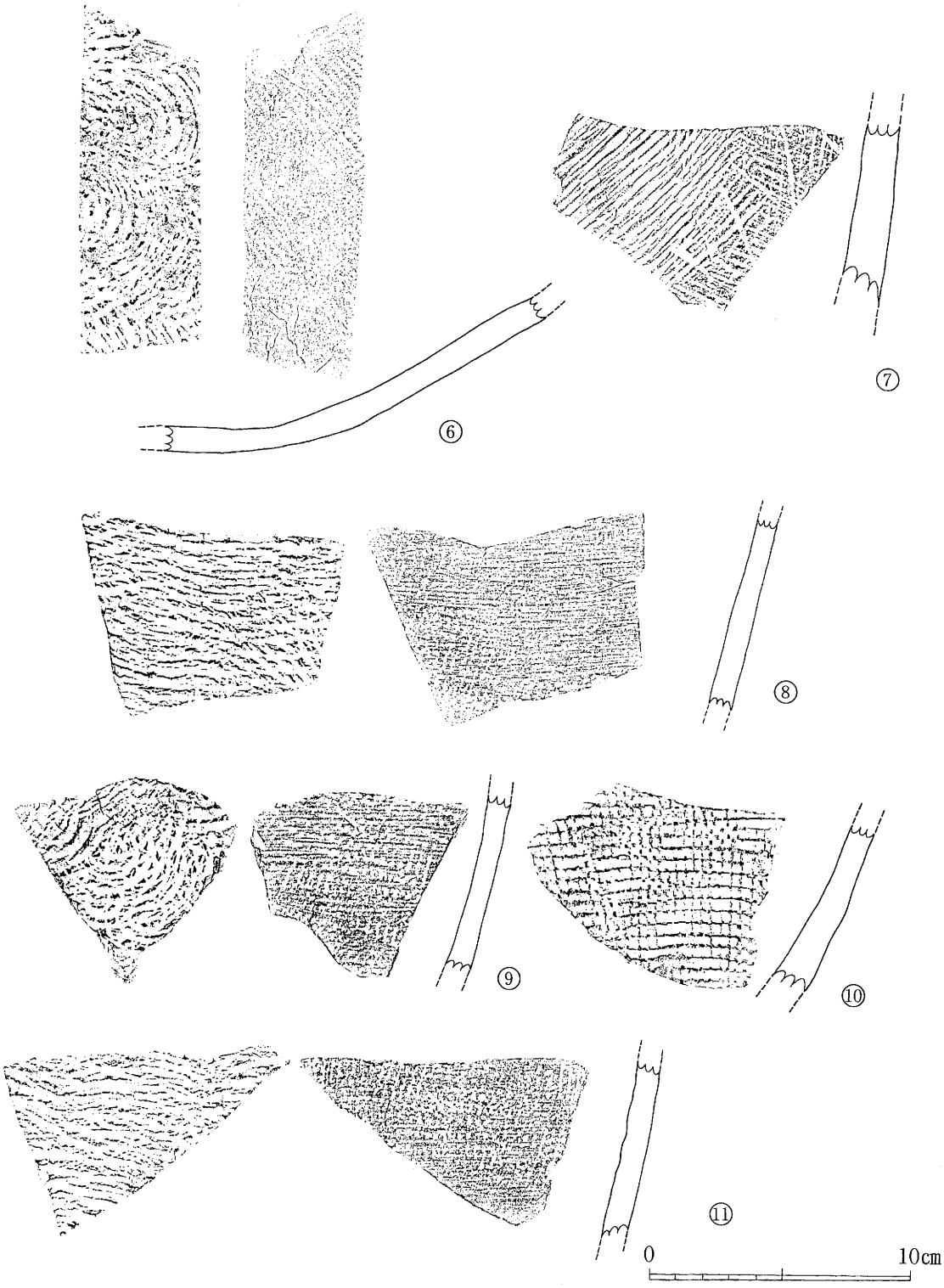
遺物は、口縁部に幾状かの凹線内を施し、その間に波状文が描かれた大型の壺形土器（１

～5）、外面格子目の叩き・内面同心円の青海波紋の叩きがほどこされたもの（6・9）などがが出土している。なかでも、1・4・5は1号、3は3号、2は5号溝状遺構と出土地点は異なるものの、同一個体と思われる。

これらの遺物は特徴から須恵のⅣb期、6世紀末～7世紀初頭に比定される。



第8図　出土遺物実測図・拓影（須恵器）



第９図　出土遺物実測図・拓影（須恵器）

3．古墳時代遺構の遺構と遺物

（1）土坑（第4図・10図～14図）

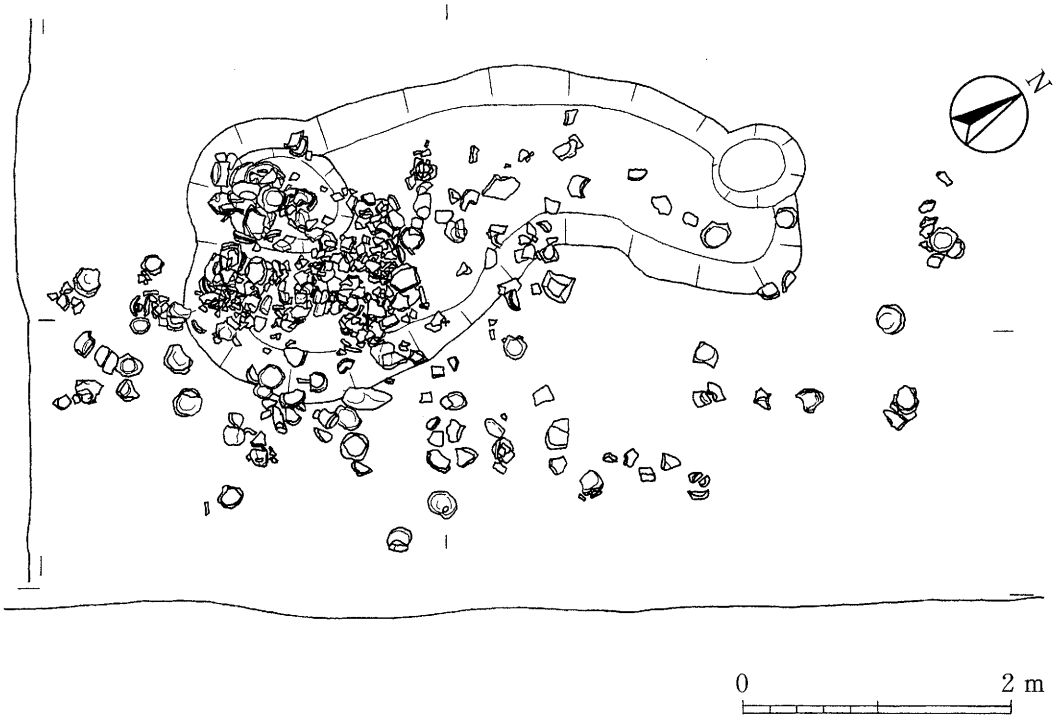
1号土坑（第10図～13図）

〈遺構〉　1号土坑は、南西部B－2～C－3グリットから検出されたもので、第Ⅱ層の黒色土で多量の土師器片が出土することから確認された遺構である。プランは掘込みが浅く、わずかにアカホヤ火山灰層に床面が不整形に残存しているのみで判断が難しいが、遺物の出土状況から長方形あるいは楕円形と思われる。

遺物の出土範囲は長軸約6.9㍍・短軸約3.3㍍を計り、わりと大きな規模の土坑である。

〈遺物〉　出土遺物のほとんどが土師器で、しかもその90％以上が坏あるいは高台付碗の破片である。その個体は底部（底部片）を教えただけでも300点以上にもなり、その比率は9（坏）：1（高台付碗）の割合である。

また、注目されるのは口縁部が内湾し、長めの高台が付いた鉢形の内黒土器（32）が出土していることで、現在のところ県内には類例がないようである。内黒土器はもう2点完全に



第10図　1号土坑実測図

復元できないが、高台付碗（33・34）が出土している。

坏はすべてヘラ切り底で、底部及び法量によって、

A．底部との境目に段を有するもの（1～6）

口縁部径9.5～10.5㌢・器高 2.5㌢前後・底径 4.5㌢前後 ―― Aa（1）

〃　　・器高 3.7㌢前後・　〃　　―― Ab（2・3）

口縁部径12.0～13.0㌢・器高3.7㌢前後・底部5～6.5㌢前後 ―― Ac（4・6）

B．底部との境目がはっきりしているもの（7～16）

口縁部径9.5～10.5㌢・器高3㌢前後・底径5㌢前後 ―― Ba（7）

〃　　・器高4㌢前後・　〃　　―― Bb（8～10）

口縁部径10.5～11.5㌢・器高4㌢前後・底径6㌢前後 ―― Bc（11・12）

口縁部径11.5～12.5㌢・器高 4.5㌢前後・底径5㌢前後 ―― Bd（13～16）

C．底部との境目が丸みをおびてはっきりしないもの（17～22）

口縁部径10.5～11.5㌢・器高3㌢前後・底径5㌢前後 ―― Ca（17・18）

口縁部径11.5～12.5㌢・器高4㌢前後・底径6㌢前後 ―― Cb（19・20）

〃　　・器高5㌢前後・　〃　　―― Cc（21）

に分類される。口縁部は外方向に直線的あるいは内湾ぎみに立ち上がっている。いずれもヨコナデ調整が施されている。

高台付碗も高台によって、

A．2㌢前後と長く、外方向にストレートぎみに延びるもの（23～25）

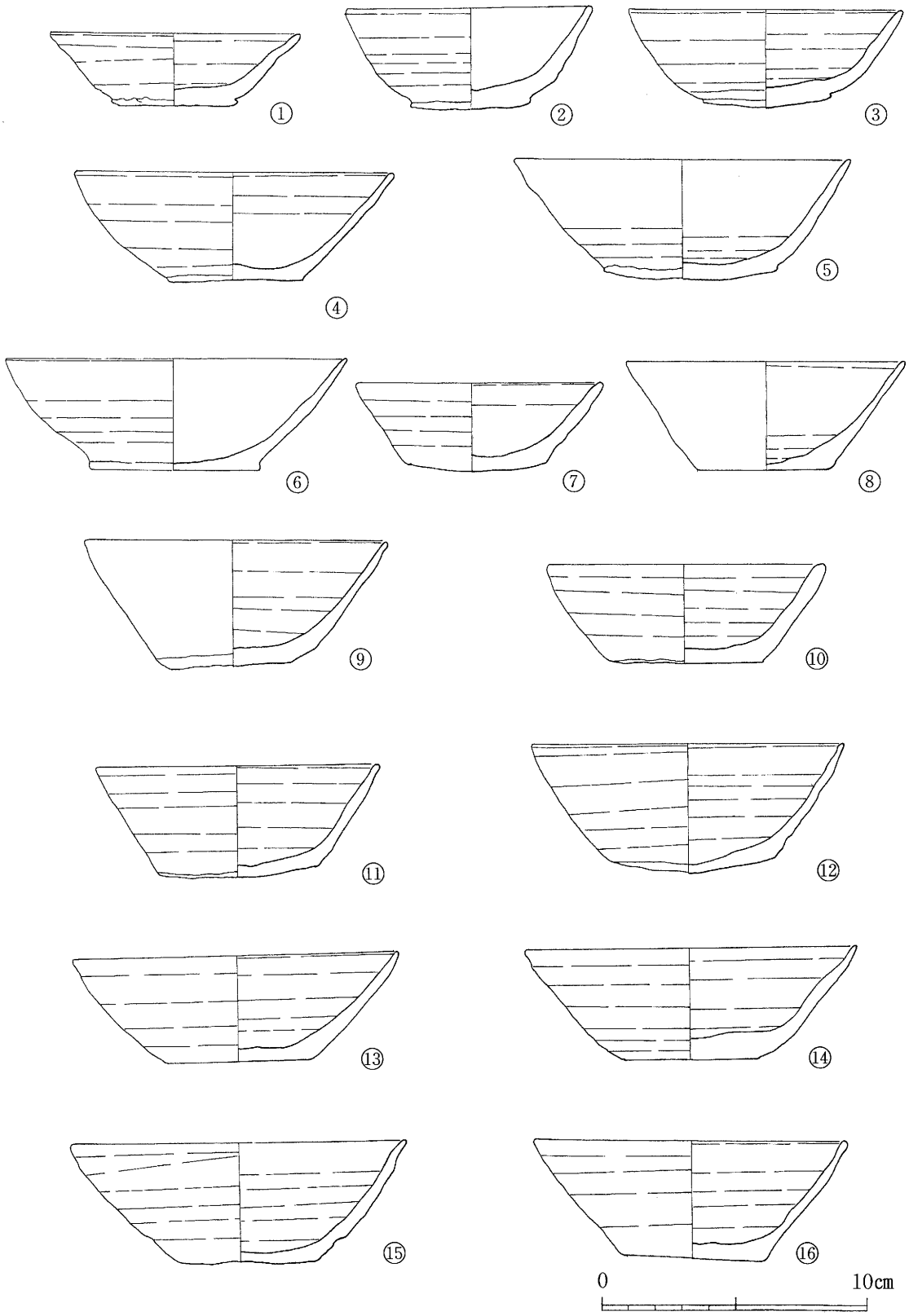
B．外方向に短く、「く」字状に大きく外反するもの（26～28）

C．外方向に短く、延びるもの（29～31）

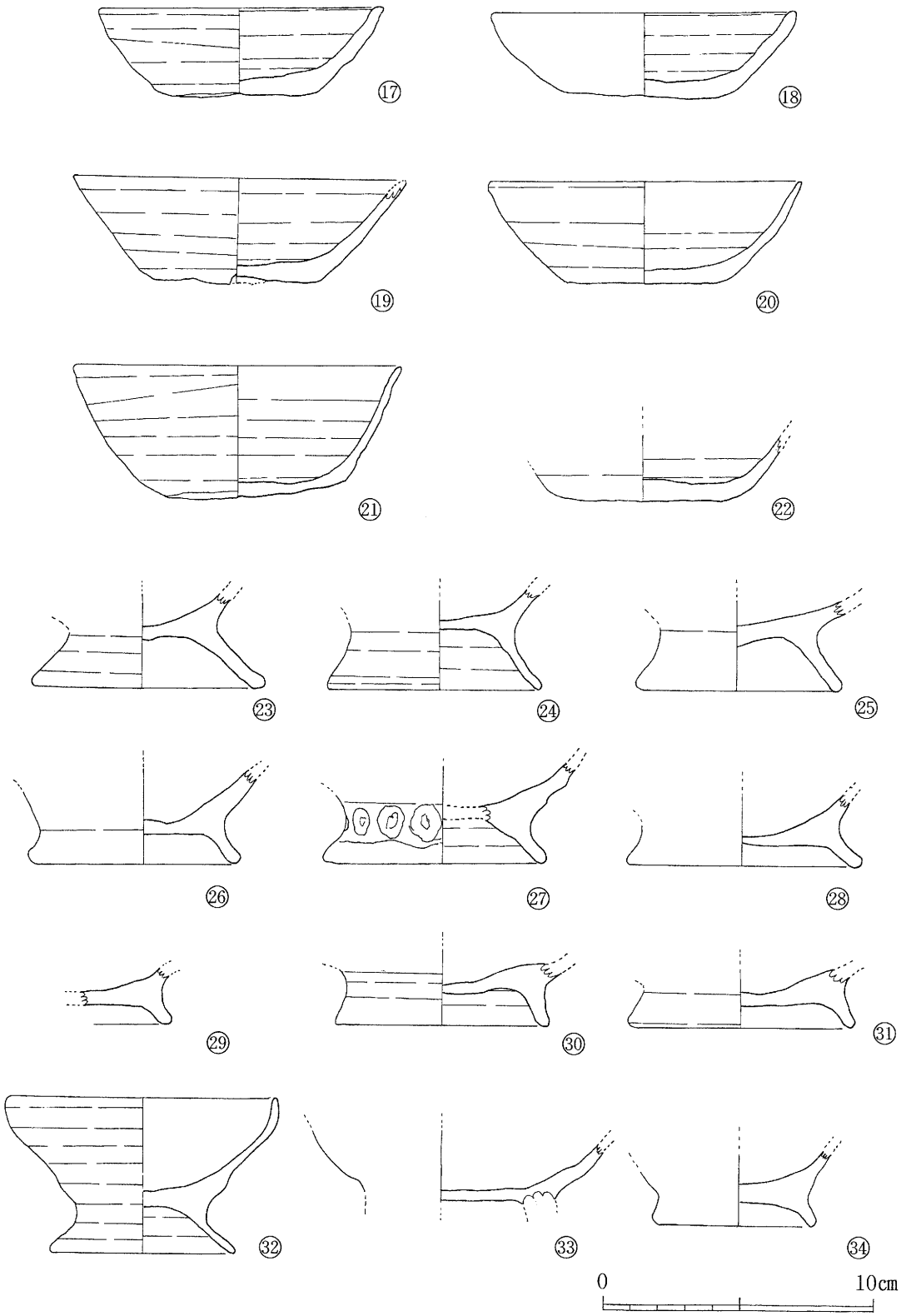
に分類される。高台端部は丸みをもち、いずれも坏と同様ヨコナデ調整が施されている。

その他、同土坑からは小型の高坏（35・36）が出土しているが、35は受部及び脚柱、36は裾部で直線的に大きく広くタイプのものである。また、37は凸面に横方向の縄目、凹面には布痕を残す平瓦である。

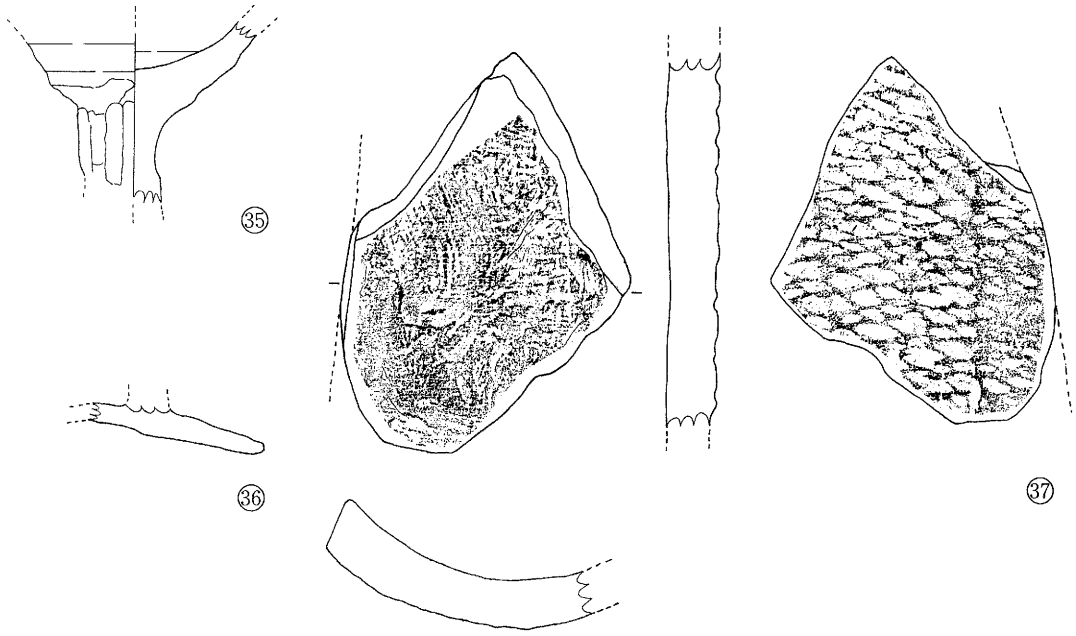
なお、これらのなかで土師器については、詳細な観察表を掲載したので参考にしていただきたい。



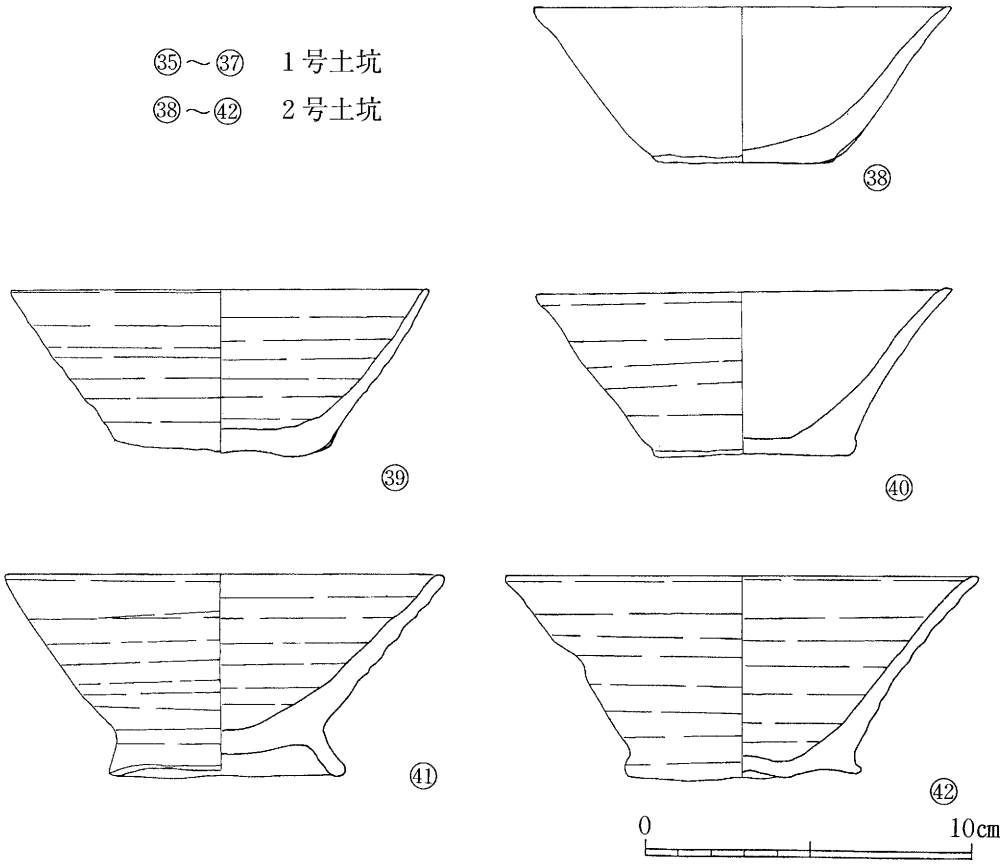
第11図　１号土坑出土遺物実測図



第12図　1号土坑出土遺物実測図



㉟～㊲　1号土坑
㊳～㊷　2号土坑

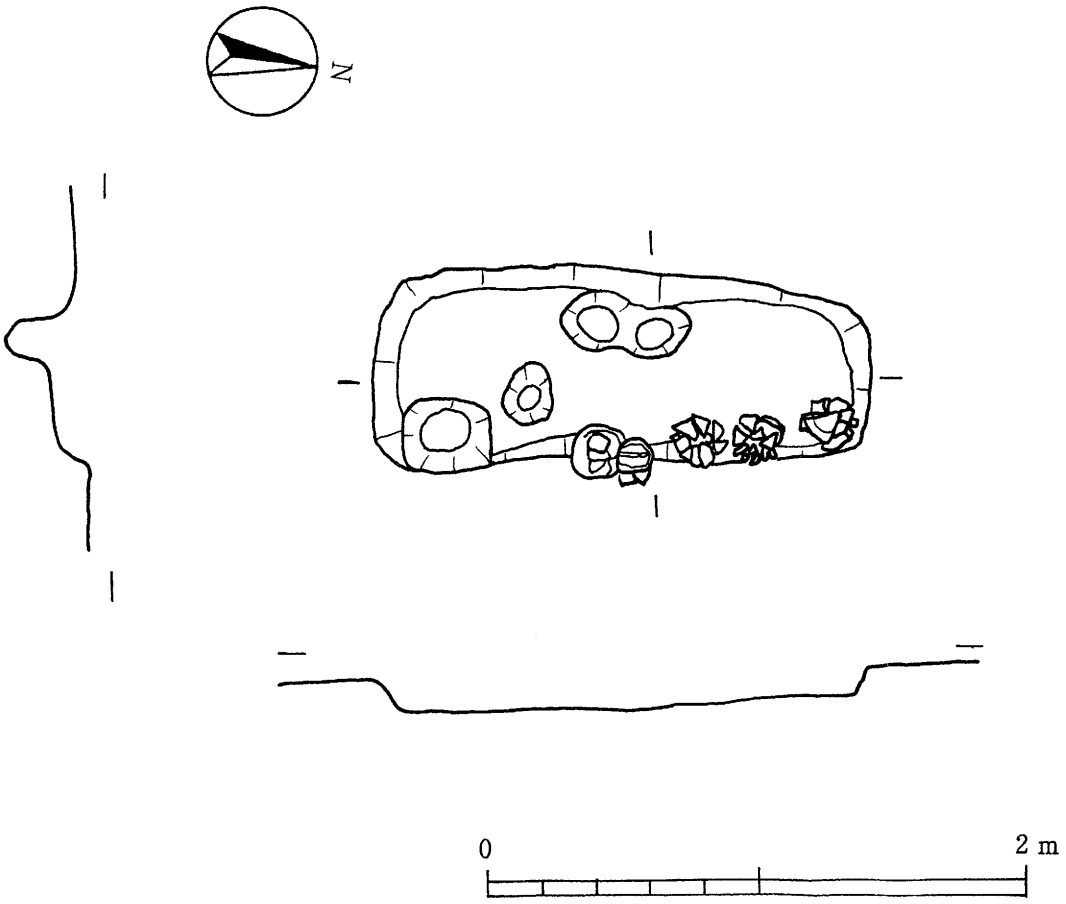


第13図　1号・2号土坑出土遺物実測図・拓影

2号土坑（第14図・15図）

〈遺構〉　調査地の南東部B－4グリットから検出された土坑で、隅丸の長方形プランを呈している。長軸1.83㍍・短軸0.7㍍の規模を有し、床面は平坦的で、壁面は約60度で立ち上がり、壁高は浅く0.11㍍を計る。円形ピットが4個掘り込まれているが、同遺構に関連するものではないと思われる。

〈遺物〉　土坑の北東、長軸側に1列に並んで出土している。いずれも完形になりうるもので、坏3点・碗2点の計5点である。坏は底部からいくとA（38）とBタイプ（39・40）が含まれるが、器高が高く、口縁部も外反しており、全体的なタイプとしては異なる。また、高台付碗（41）も高台端部が平坦で、1号土坑のものとはタイプが異なる。さらに、底部が斜め下方向へ強く張りだした碗（42）も出土している。



第14図　2号土坑実測図

3号土坑（第4図）

〈遺構〉　調査地の東部C－5～D－5グリット、2号溝状遺構に隣接して検出された土坑で、隅丸の長方形プランを呈している。長軸2.0㍍・短軸1.4㍍、床面は平坦的ではあるが傾斜している。壁面は約75度で立ち上がり、壁高0.44㍍を計る。

遺物は出土していない。

4号土坑（第4図）

〈遺構〉　C－5グリット、2号溝状遺構の東に隣接して検出された土坑で、楕円形プランを呈している。長軸 2.0㍍・短軸 1.4㍍、深さ0.33㍍を計る。

遺物は出土していない。

5号土坑（第4図）

〈遺構〉　C－3グリット、1号溝状遺構の西に隣接して検出された土坑で、楕円形プランを呈している。長軸1.6㍍・短軸1.0㍍、深さ0.32㍍を計る。

遺物は出土していない。

6号～8号土坑（第4図）

〈遺構〉　これら3基の土坑は、調査地の南西部B－2グリットに並行して位置している。6号・7号土坑は長方形プランを呈し、6号土坑は長軸1.76㍍・短軸1.3㍍、深さ0.35㍍、7号土坑は長軸1.8㍍・短軸1.4㍍、深さ0.35㍍を計る。8号土坑は楕円形プランのもので、長軸1.75㍍・短軸1.4㍍、深さ0.35㍍を計る。

いずれの土坑からも遺物は出土していない。

9号土坑（第4図）

〈遺構〉　調査地の北東部E－4～F－4グリット、7号溝状遺構の南に隣接して検出された土坑で、楕円形プランを呈している。長軸 1.5㍍・短軸1.05㍍、深さ0.1㍍を計る。

遺物は出土していない。

10号土坑（第4図）

〈遺構〉　調査地の北西部F－2グリット、7号溝状遺構と切り合って検出された土坑で、北側半分程が削平されている。円形プランと推定される。径1.7㍍・深さ0.2㍍を計る。

遺物は出土していない。

（２）溝状遺構（第４図・16図・17図）

１号溝状遺構（第16図）

〈遺構〉　調査地の南中央部からわずかに蛇行しながら北へ延び、中央部で屈曲して西に延びている溝状遺構である。ほとんどの溝状遺構が東西に延びているため、中央部では２号・４号・５号・６号溝状遺構と切り合っている。また、途中から二股に別れて西に延びている。現存長52.0㍍・幅0.7～1.2㍍・深さ0.2～0.3㍍を計る。

〈遺物〉１号溝状機構からは須恵器（第８図1･4～６）・土師器・瓦器・陶磁器などが出土している。全体的には土師器と須恵器が多く、土師器が60％・須恵器が35％以上を占める。

土師器は完全に復元できうるものはないが、坏ではＡ～Ｃタイプ（１・２－Ａｃ、３・４－Ｂｃ、５・６－Ｃａ、７－Ｃｂ？）、高坏ではＡタイプ（８）・Ｂタイプ（９・10）のＣタイプ（11）ものが出土しており、これらがほとんどを占める。12は口縁推定径21㌢・器高7.3㌢・底推定径７㌢を計る鉢形の瓦器で、灰白色を呈している。13は短く端部が平坦な高台が付いた鉢形の陶磁器で、底径 6.3㌢、緑灰色を呈している。

２号溝状遺構（第16図）

〈遺構〉　調査地の南東端から直線的に北に延び、中央部で110度の角度で西に延びている溝状遺構である。東部で３号・中央部で２号・西部で４号溝状遺構と切り合っている。溝状遺構のなかでは最大のもので、現存長62.0㍍・幅1.7～2.6㍍・深さ0.27～0.37㍍を計る。

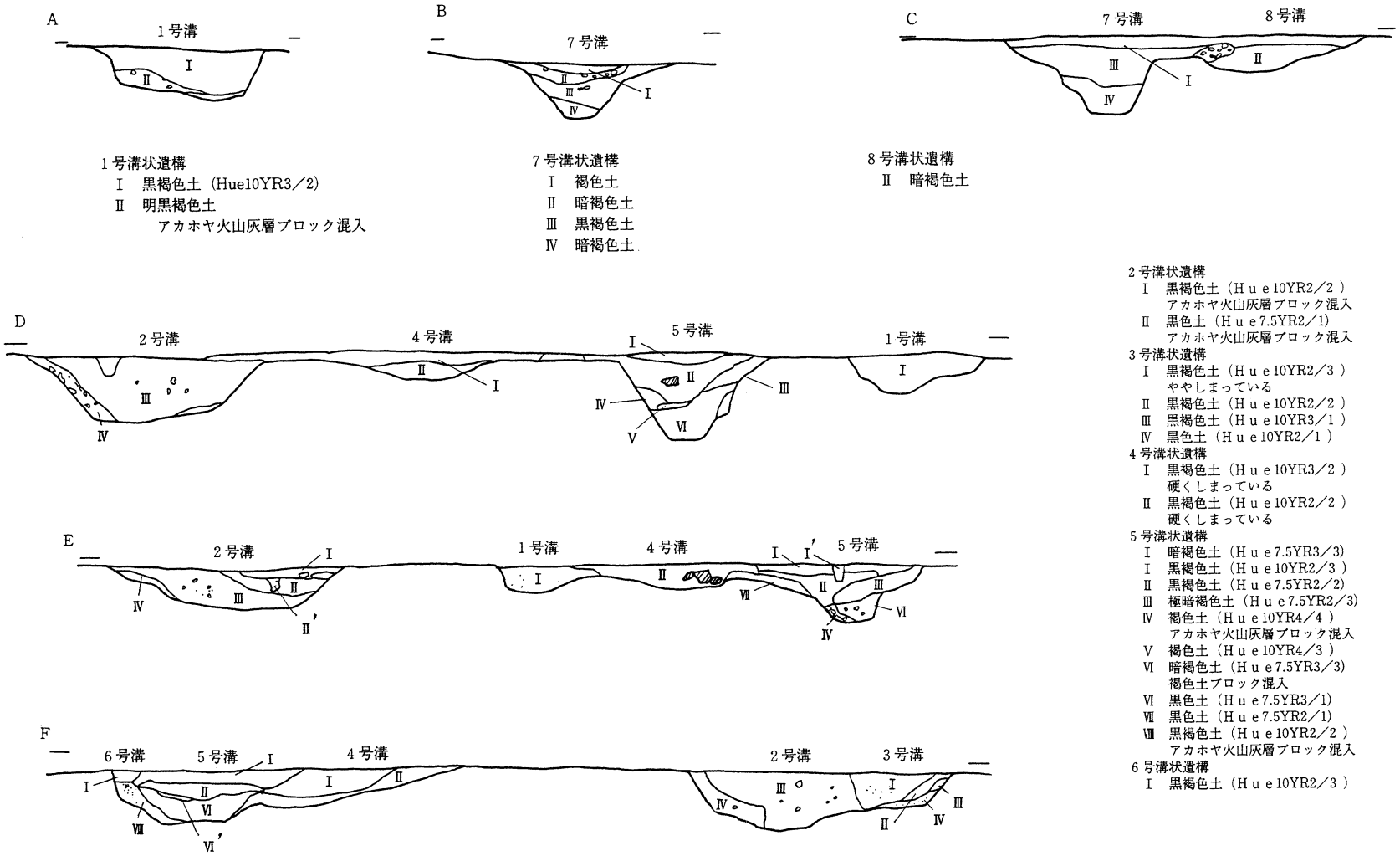
〈遺物〉　遺物は須恵器（第９図7･10）土師器・青磁の約30点が出土している。土師器は小片でタイプの判断は難しいが、坏はＣタイプのものが含まれているようである。14はＢタイプの高台付碗、15は鉢形（浅丸形）の青磁で、明緑灰色を呈している。

３号溝状遺構（第16図）

〈遺構〉　調査地の東中央部から東西に延びている溝状遺構で、２号溝状遺構と切り合っている。現存長19.2㍍・幅0.6～0.8㍍・深さ0.16～0.22㍍を計る。また、東端には堰と想定される遺構が存在する。

〈遺構〉　遺物は須恵器（第８図3･9図８）・土師器が少量出土している。17は小甕（銭甕形）の須恵器で、上げ底の推定径12㌢を計る。16は糸切り底の皿で、上げ底ぎみである。糸切り底の土器は、本遺跡ではこれを含めてわずかに３点出土しているのみである。

４号・５号溝状遺構（第17図）



1号溝状遺構
Ⅰ　黒褐色土（Hue10YR3／2）
Ⅱ　明黒褐色土
　　アカホヤ火山灰層ブロック混入

7号溝状遺構
Ⅰ　褐色土
Ⅱ　暗褐色土
Ⅲ　黒褐色土
Ⅳ　暗褐色土

8号溝状遺構
Ⅱ　暗褐色土

2号溝状遺構
Ⅰ　黒褐色土（Ｈｕｅ10YR2／2）
　　アカホヤ火山灰層ブロック混入
Ⅱ　黒色土（Ｈｕｅ7.5YR2／1）
　　アカホヤ火山灰層ブロック混入
3号溝状遺構
Ⅰ　黒褐色土（Ｈｕｅ10YR2／3）
　　ややしまっている
Ⅱ　黒褐色土（Ｈｕｅ10YR2／2）
Ⅲ　黒褐色土（Ｈｕｅ10YR3／1）
Ⅳ　黒色土（Ｈｕｅ10YR2／1）
4号溝状遺構
Ⅰ　黒褐色土（Ｈｕｅ10YR3／2）
　　硬くしまっている
Ⅱ　黒褐色土（Ｈｕｅ10YR2／2）
　　硬くしまっている
5号溝状遺構
Ⅰ　暗褐色土（Ｈｕｅ7.5YR3／3）
Ⅰ　黒褐色土（Ｈｕｅ10YR2／3）
Ⅱ　黒褐色土（Ｈｕｅ7.5YR2／2）
Ⅲ　極暗褐色土（Ｈｕｅ7.5YR2／3）
Ⅳ　褐色土（Ｈｕｅ10YR4／4）
　　アカホヤ火山灰層ブロック混入
Ⅴ　褐色土（Ｈｕｅ10YR4／3）
Ⅵ　暗褐色土（Ｈｕｅ7.5YR3／3）
　　褐色土ブロック混入
Ⅵ　黒色土（Ｈｕｅ7.5YR3／1）
Ⅶ　黒色土（Ｈｕｅ7.5YR2／1）
Ⅷ　黒褐色土（Ｈｕｅ10YR2／2）
　　アカホヤ火山灰層ブロック混入
6号溝状遺構
Ⅰ　黒褐色土（Ｈｕｅ10YR2／3）

第15図　溝状遺構土層図

〈遺構〉　3号溝状遺構の北、ともに東西に延びている溝状遺構である。中央部から東は重複している。また、西部端で1号溝状遺構（4号）、東部で6号溝状遺構（4号・5号）と切り合っている。

4号溝状遺構は現存長18.3㍍・幅1.2～1.6㍍・深さ0.2㍍前後、中央部から東部にかけて幅約40㌢範囲で礫が集石（配石）されている。5号溝状遺構は現存長18.3㍍・幅1.2～1.6㍍・深さ0.43～0.73㍍、中央部付近を中心に礫が散布している。

〈遺物〉　4号溝状遺構からは須恵器（第9図11）・土師器・陶器の約50点が出土している。19はAタイプの坏であるが、底径は大きく7㌢を計る。18はCタイプの坏である。20は常滑系の大壺の口縁部で、口唇部は折り返され丸みをもっている。器厚はあつく、灰オリーブ色を呈している。21～23は浅半球形の小碗で、21は自然釉がかかり緑色、22・23は灰白色を呈している。

5号溝状遺構からは須恵器（第8図2・9図9）・土師器の約20点が出土しているが、土師器のほとんどはCタイプ（24～26）の高台付碗と思われる。

6号溝状遺構

〈遺構〉　調査地の北東部端から斜め下方向（西南西）に延びている溝状遺構であるが、そのほとんどが4号・5号溝状遺構と重複している。現存長17.5㍍・幅0.6㍍前後・深さは浅く0.06㍍を計る。

〈遺物〉　遺物は出土していない。

7号溝状遺構（第4図）

〈遺構〉　調査地の北側、北東端から西に延びている溝状遺構で、中央部で8号溝状遺構・西部で弥生時代の竪穴式住居跡と切り合っている。現存長34.0㍍・幅0.9～1.5㍍・深さ0.3～0.56㍍を計る。

〈遺物〉　遺物は出土していない。

8号溝状遺構（第4図）

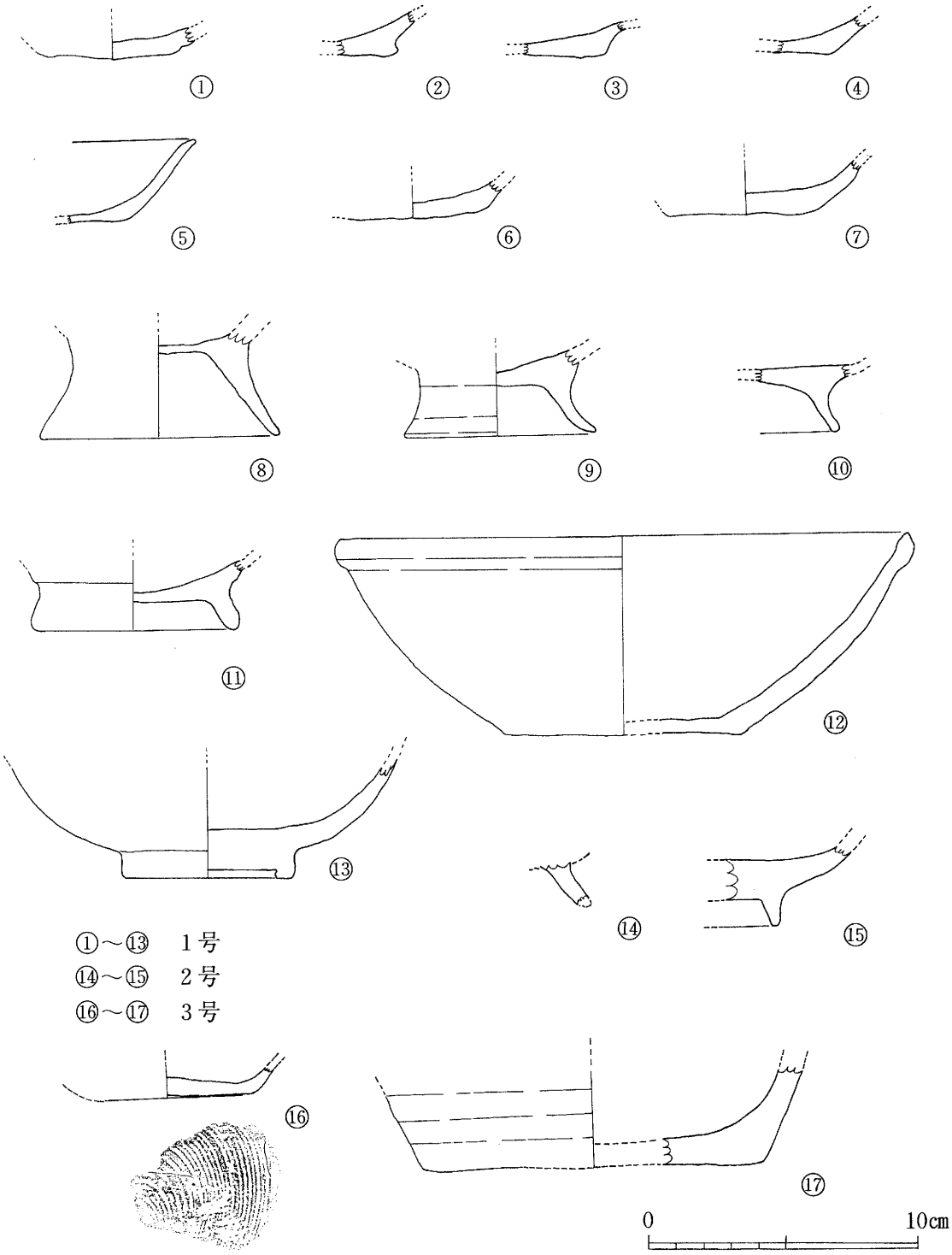
〈遺構〉　7号溝状遺構と重複あるいは並行しながら西に延びている溝状遺構で、現存長25.0㍍・幅0.95～1.15㍍・深さ0.14～0.2㍍を計る。

〈遺物〉　遺物は他溝状遺構と同様の須恵器の小片が出土いているが、器形などは判断がつきにくい。

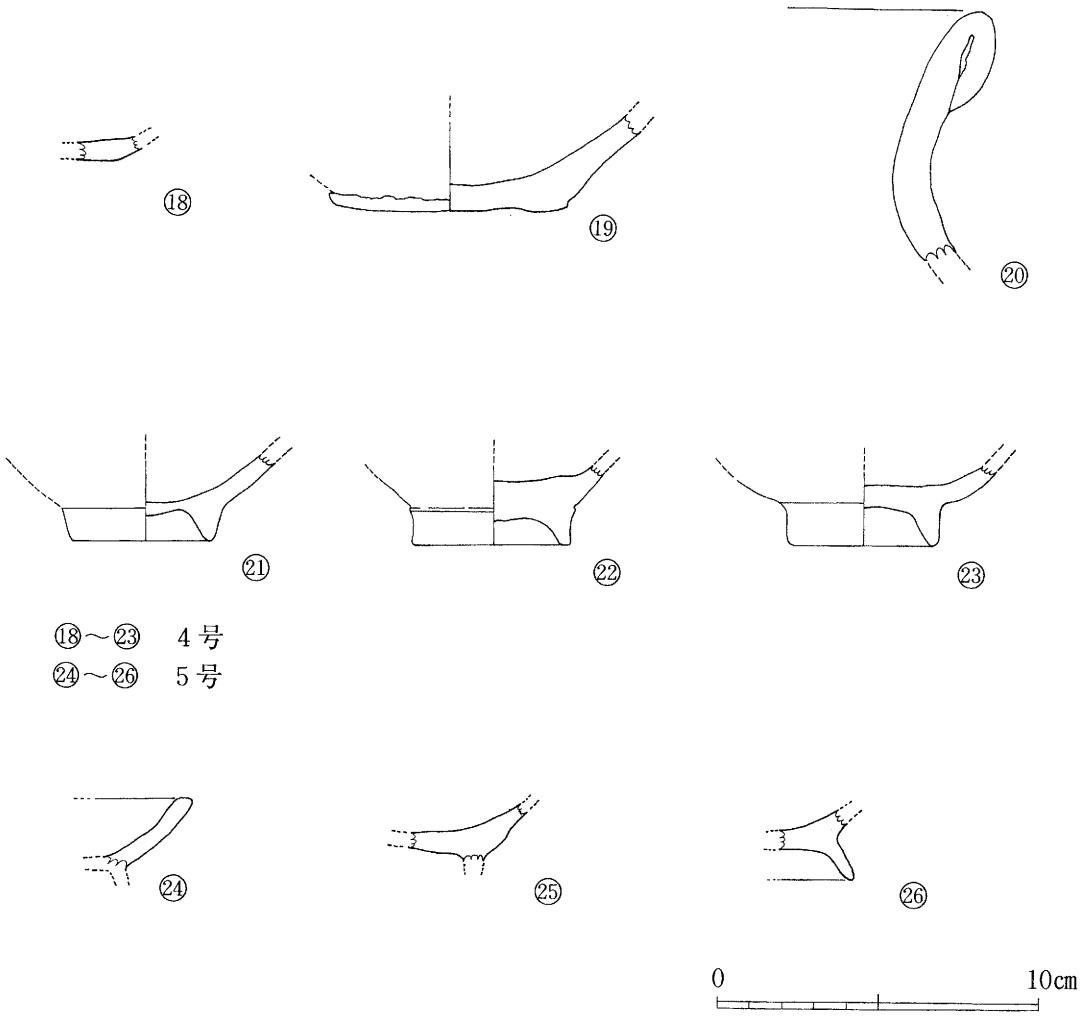
9号・10号溝状遺構（第4図）

〈遺構〉　調査地の中央部から並行して西に延びている小さな溝状遺構で、9号溝状遺構は現存長13.9㍍・幅0.5㍍前後・深さ0.1㍍前後を計る。10号溝状遺構は現存長14.9㍍・幅0.5㍍前後・深さ0.1㍍前後を計る。

〈遺物〉　遺物は出土していない。



第16図　1号～3号溝状遺構出土遺物実測図・拓影



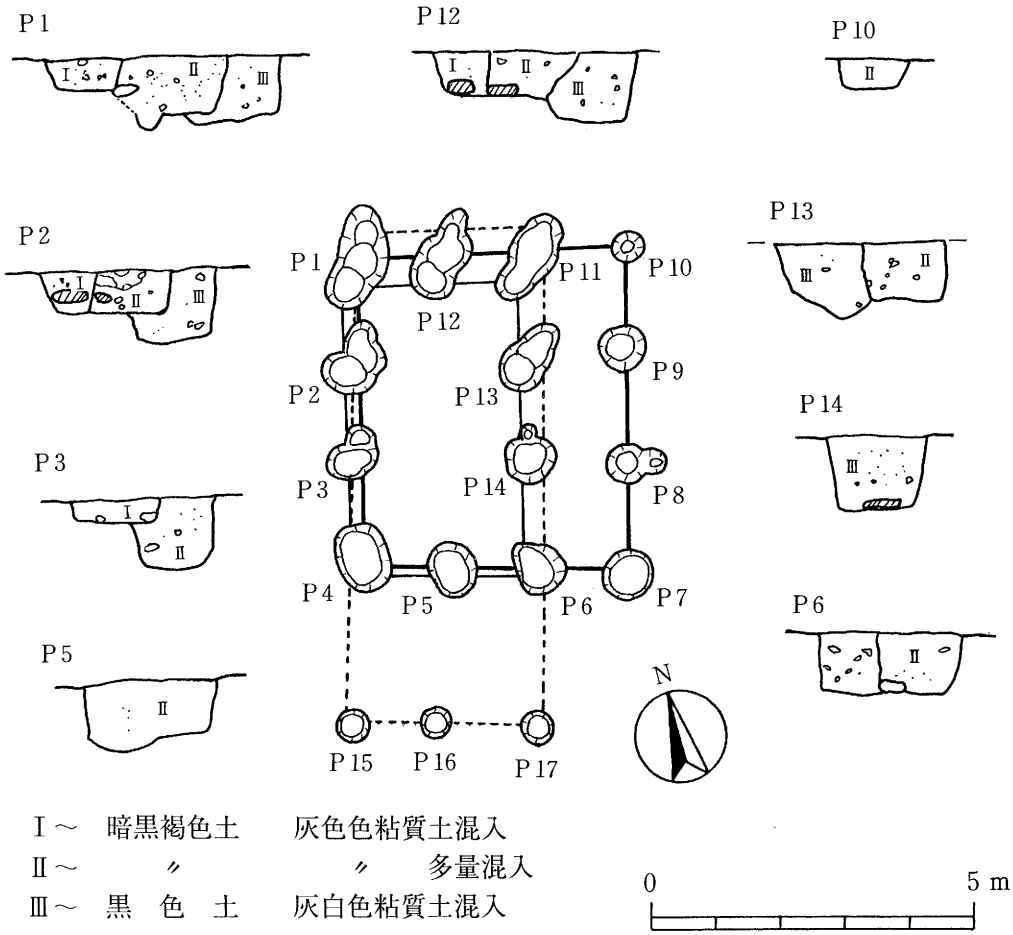
第17図　4号・5号溝状遺構出土遺物実測図

（3）掘立柱建物跡（第18～20図）

1号掘立柱建物跡（第18図・20図）

〈遺構〉　1号溝状遺構と2号溝状遺構に狭まれたC－4グリットから検出されたものである。柱穴の形状及び埋土状況から3回建て替えられているようで、その際1回は東側に増築されている。また、これらの柱穴と並行して南側に3個存在するが、これが同建物跡に関連した柱穴であれば、2回増築されたことになる。主軸の方向はN－16°－E、柱穴はすべて円形で、柱間1.5～2.5㍍、深さ0.14～0.45㍍を計る。

〈遺物〉　土師器がほとんどで、わずかにP3とP13から須恵器が出土している。須恵器は他遺構同様Ⅳb期の甕（壺）形土器で、土師器はA～Cタイプ（1～5）の坏が出土しているが、5はCタイプではあるものの底径6.5㌢を計るⅢに近い形の坏である。また、Cタイプの高台付碗で、表面黒色を呈した黒色土器（6）が1点のみ出土している。



第18図　1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

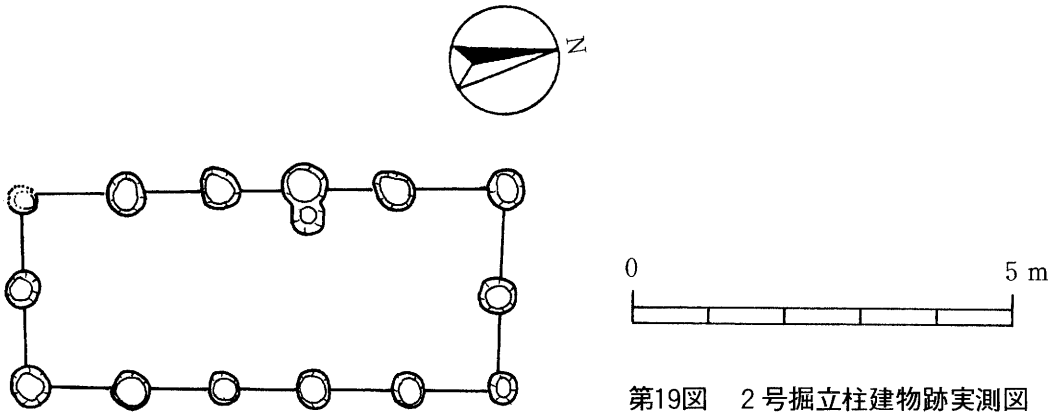
2号掘立柱建物跡（第19図）

〈遺構〉　1号溝状遺構の南、B－4グリットから検出されたもので、1号溝状遺構と隣接している。

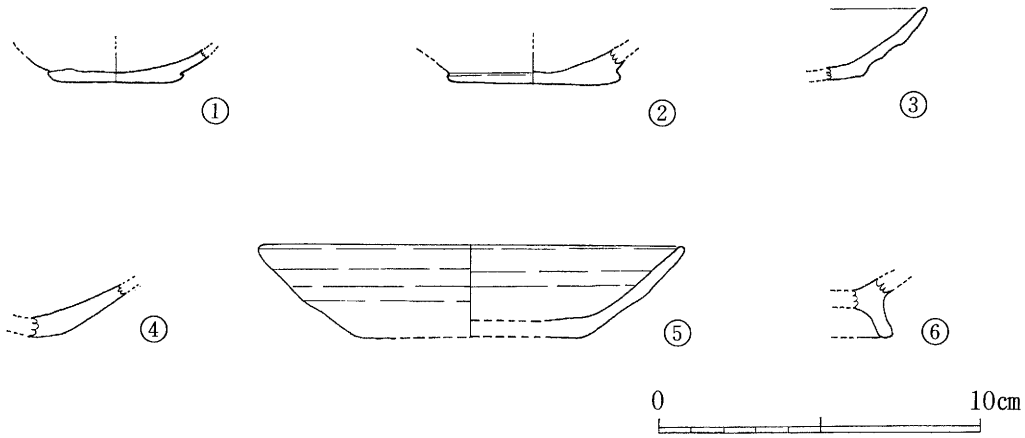
2間×5間のもので、主軸N－15°－E、桁行（NS）2.6㍍・梁間（EW）6.2㍍を計る。

柱穴はすべて円形で、柱間 1.2㍍前後、深さ21㌢～49㌢を計る。

〈遺物〉　遺物は出土していない。



第19図　2号掘立柱建物跡実測図

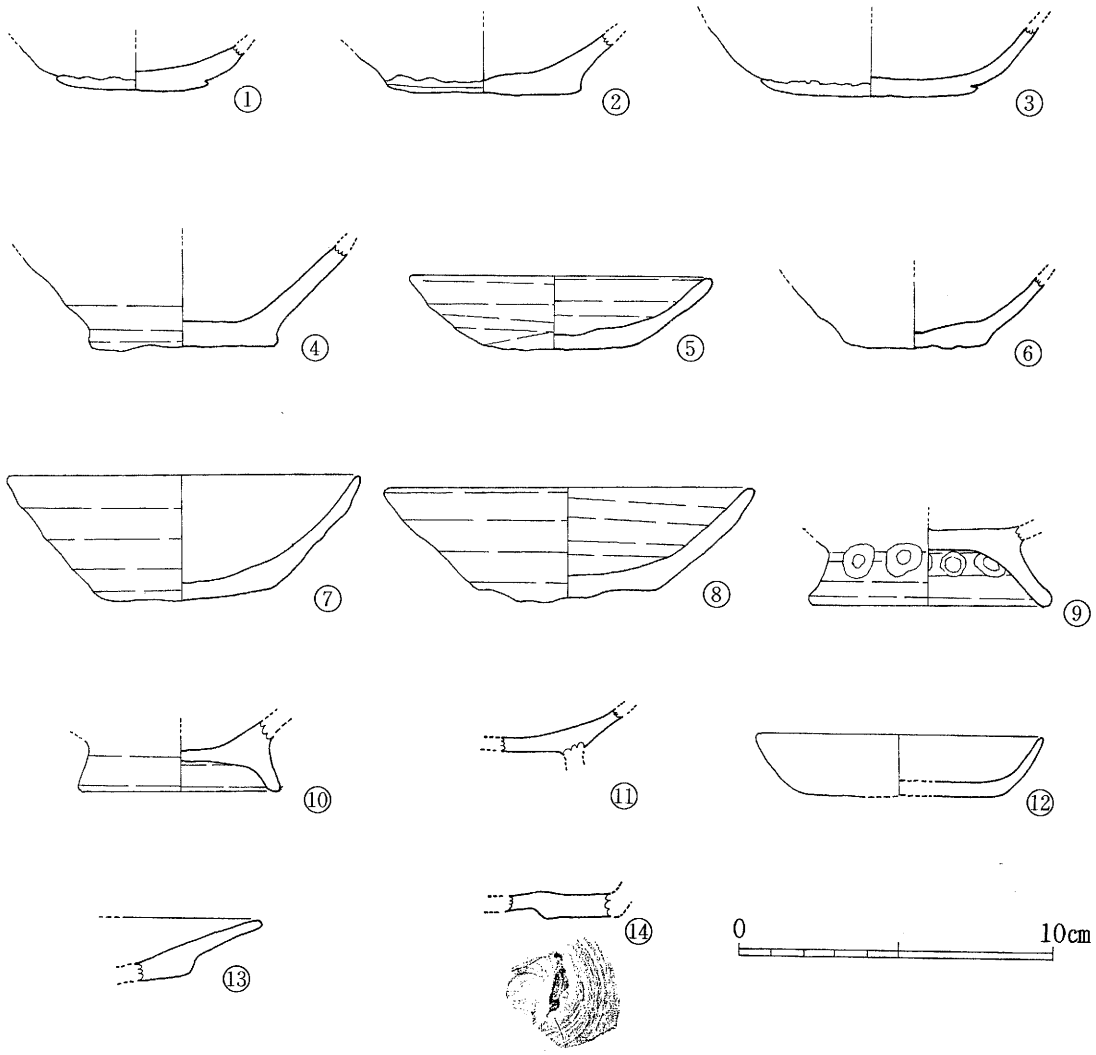


第20図　1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

（4）柱穴（ピット）

〈遺構〉　調査地全面に約850個検出されている。いずれにしても狭範囲にこれだけの数が検出されており、何回となく同場所に掘立柱建物が建てられたことを表していることから、より複雑な柱穴群となっている。また、出土遺物も限られていることから、時代的なことなど判断が難しく、不明な点が多い。

〈遺物〉　遺物は土師器がほとんどで約200点、わずかに須恵器が含まれている。土師器は坏が多くA～Cタイプものが含まれているが、小片が多く細かい器形の判断が難しい。



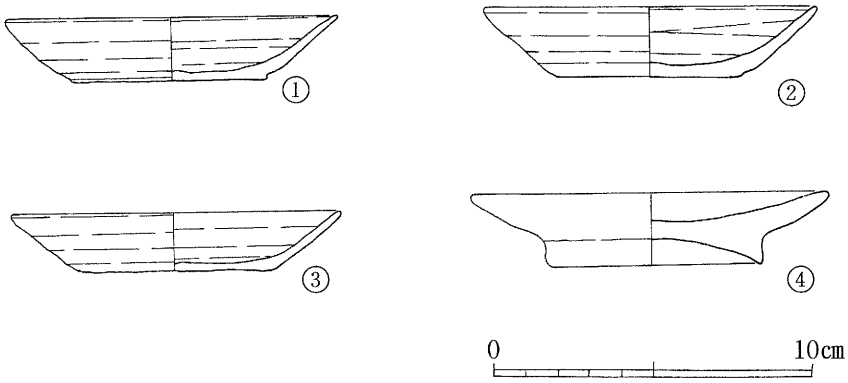
第21図　柱穴（ピット）出土遺物実測図・拓影

坏はA～Cタイプ（1～8）のものが含まれ、高台付碗は、量的に少なく、Bタイプ（9）とCタイプ（10）のものが含まれている。また、高台付碗ではBタイプと思われる内黒土器（11）も出土している。

その他、量的には圧倒的に少ない皿（12・13）や糸切り底の坏（14）が出土している。12は低部との境目がはっきりしない、13は段をもつ小皿の土師器である。

（5）その他の遺物（第22図）

B－2グリットで、1号溝状遺構に接したわずかな窪みから、本遺跡では貴重な小皿が3枚並んで出土している。薄手の小皿（1～3）で、低部との境目がはっきりしている。また、その北部、C－3グリットのわずかな窪みからは高台付の小皿が出土している。厚手で、高台は下方向に延び、高台端部は尖りぎみのものである。本遺跡からは類似品はみあたらない。



第22図　出土遺物実測図

4．時代不明の遺構

柱列（柵列状）遺構（第　図）

調査地の北部、7号溝状遺構と5号溝状遺構との間を中心にして、東西に4列並行して延びている。いずれも円形で、径40㌢前後（径25㌢～55㌢）が多く、深さは浅く20前後を計る。埋土も他柱穴は黒色あるいは黒褐色なのに対し、灰褐色を呈している。

遺物は出土しておらず、時代的なことなど判断に苦しむが、埋土及び検出状況などから中世以降の遺構と推定される。また、使用目的についても、昔時三宅神社の寺域でもあったことから、三宅神社に関連した遺構とも思われるが、不明な点が多く判断が難しい。

表１　土師器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	部位	調整 外面	調整 内面	法量 口縁部径	法量 器高	法量 底部径	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
第11図	1	1号土坑	坏	口縁部～底部	ヨコナデ	ヨコナデ	9.6(推定)	2.8	4.5	良好	浅黄橙色 7.5YR8/6	にぶい橙 7.5YR7/4	2~3㎜前後の砂粒含む・白雲母混入	
〃	2	〃	〃	〃	〃	〃	9.5(推定)	3.8	4.6	〃	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 5YR6/4	〃	
〃	3	〃	〃	〃	〃	〃	10.2(推定)	3.7	4.8	〃	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	2~3㎜前後の砂粒含む	
〃	4	〃	〃	〃	〃	〃	12.2(推定)	4.1	5.0	〃	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	3~5㎜前後の砂粒含む	スス付着
〃	5	〃	〃	〃	〃	〃	12.7(推定)	4.5	6.5	やや不良	浅黄橙色 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	2~3㎜前後の砂粒含む	底部の風化著しい
〃	6	〃	〃	〃	〃	〃	13.0(推定)	4.2	6.4	良好	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	〃	風化
〃	7	〃	〃	〃	〃	〃	9.4	3.4	5.4	やや不良	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	3~5~5㎜前後の砂粒含む	底部の風化著しい
〃	8	〃	〃	〃	〃	〃	10.5(推定)	4.1	5.1	〃	淡橙色 5YR8/3	にぶい橙 5YR7/4	2~3㎜前後の砂粒含む	風化著しい
〃	9	〃	〃	〃		〃	11.5	4.9	4.6	良好	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	〃	表面の風化著しい
〃	10	〃	〃	ほぼ完形	ヨコナデ	〃	10.5	3.7	5.8	〃	淡橙色 5YR8/4	淡橙色 5YR8/3	3~5~5㎜前後の砂粒含む	スス付着・荒い仕上げ
〃	11	〃	〃	口縁部～底部	〃	〃	10.7(推定)	4.2	6.1	〃	淡橙色 5YR8/3	淡橙色 5YR8/3	〃	
〃	12	〃	〃	〃	〃	〃	11.8(推定)	4.9	6.2	〃	灰白色 5YR8/2	灰白色 5YR8/2	2~3㎜前後の砂粒含む	
〃	13	〃	〃	〃	〃	〃	12.3(推定)	3.6	5.6	〃	明褐灰色 7.5YR7/2	明褐灰色 7.5YR7/2	3~5㎜前後の砂粒含む	荒い仕上げ
〃	14	〃	〃	〃	〃	〃	12.5(推定)	4.2	5.0	〃	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	2~3㎜前後の砂粒含む	スス付着
〃	15	〃	〃	〃	〃	〃	12.7(推定)	4.6	5.3	〃	にぶい黄橙色10YR7/2	にぶい黄橙色10YR7/2	〃	スス付着・荒い仕上げ
〃	16	〃	〃	〃	ヨコナデ・ヘラ割り	〃	11.9	4.6	5.3	〃	浅黄橙色 7.5YR8/3	浅黄橙色 7.5YR8/3	3~5~5㎜前後の砂粒含む	荒い仕上げ
第12図	17	〃	〃	〃	〃	〃	10.5(推定)	3.3	5.3	〃	浅黄橙色 7.5YR8/3	浅黄橙色 7.5YR8/3	2~3㎜前後の砂粒含む	スス付着
〃	18	〃	〃	〃		〃	11.4	3.2	5.3	やや不良	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	〃	スス付着・風化著しい
〃	19	〃	〃	胴部～底部	ヨコナデ	〃			6.0	良好	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	〃	スス付着
〃	20	〃	〃	口縁部～底部	〃	〃	11.7(推定)	3.8	5.6	〃	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/3	〃	スス付着・風化
〃	21	〃	〃	〃		〃	12.1(推定)	5.0	6.6	やや不良	淡黄橙色 10YR8/4	淡黄橙色 10YR8/4	〃	風化著しい
〃	22	〃	〃	胴部～底部	ヨコナデ	〃			6.3	〃	浅黄橙色 7.5YR8/3	浅黄橙色 7.5YR8/3	〃	
〃	23	〃	高台付椀	高台	〃				8.7	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/6	〃 ・白雲母混入	風化著しい

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	部位	調整 外面	調整 内面	法量 口縁部径	法量 器高	法量 底部径	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
第12図	24	1号土坑	高台付椀	高台	ヨコナデ	ヨコナデ			8.1	良好	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	2㎜前後の砂粒含む	
〃	25	〃	〃	〃	〃				7.6	〃	浅黄橙色 7.5YR8/3	浅黄橙色 7.5YR8/3	〃	風化著しい
〃	26	〃	〃	胴部~高台		ヨコナデ			7.9	やや不良	橙色 5YR7/6	淡橙色 5YR8/4	3㎜前後の砂粒含む	〃
〃	27	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃			8.4	良好	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅橙色 5YR8/4	〃	指押圧痕あり
〃	28	〃	〃	高台	〃	〃			8.8	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/3	2㎜前後の砂粒含む	
〃	29	〃	〃	〃	〃	〃				〃	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	3㎜前後の砂粒含む	
〃	30	〃	〃	〃	〃	〃			8.0	〃	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	2㎜前後の砂粒含む	
〃	31	〃	〃	〃	〃	〃			8.5	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	3㎜前後の砂粒含む	風化著しい
〃	32	〃	〃	口縁部~底部	〃	ヘラ磨き	9.8	5.8	6.8(推定)	〃	にぶい橙色 7.5YR7/3	黒色 7.5YR2/1	〃	内黒土器
〃	33	〃	〃	胴部	〃	ヨコナデ				〃	橙色 5YR6/6	黒色 7.5YR2/1	〃	〃
〃	34	〃	〃	胴部~~高台	〃	〃				〃	橙色 5YR7/6	黒色 7.5YR2/1	〃	〃 ・表面風化
第13図	35	〃	高坏	受部~脚柱部	ヨコナデ・ヘラ削り	〃				〃	にぶい橙色 5YR7/4	にぶい橙色 5YR7/4	2㎜前後の砂粒含む	荒い仕上げ
〃	36	〃	〃	裾部	〃	ヘラ磨き				〃	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	〃	
〃	38	2号土坑	坏	口縁部~底部		ヨコナデ	12.7(推定)	4.8	5.5	〃	淡橙色 5YR8/3	にぶい橙色 7.5YR7/3	〃	表面風化著しい
〃	39	〃	〃	ほぼ完形	ヨコナデ	〃	13.0	5.1	6.0	〃	にぶい橙色 5YR6/3	にぶい橙色 5YR6/3	〃	
〃	40	〃	〃	口縁部~底部	ヨコナデ・ヘラ削り	〃	12.8	5.3	6.0	〃	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/3	3~4㎜前後の砂粒含む	荒い仕上げ
〃	41	〃	高台付椀	口縁部~高台	ヨコナデ	〃	13.4(推定)	6.3	7.4	〃	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/3	2㎜前後の砂粒含む	
〃	42	〃	碗	ほぼ完形	〃	〃	14.9	6.5	6.9	〃	にぶい橙色 5YR6/3	にぶい橙色 5YR6/3	〃	
第16図	1	1号溝状遺構	坏	底部		〃			4.8	やや不良	浅黄橙色 7.5YR8/6	浅黄橙色 7.5YR8/6	〃	風化著しい
〃	2	〃	〃	〃						〃	橙色 5YR7/8	黄橙色 7.5YR8/6	〃	〃
〃	3	〃	〃	胴部~底部	ヨコナデ	ヨコナデ				良好	橙色 7.5YR7/6	にぶい橙色 5YR7/4	〃	
〃	4	〃	〃	底部	ヘラ磨き	〃				〃	浅黄橙色 7.5YR8/3	浅黄橙色 7.5YR8/3	〃	
〃	5	〃	〃	口縁部~底部					4.5(推定)	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	〃	風化著しい

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	部位	調整 外面	調整 内面	法量 口縁部径	法量 器高	法量 底部径	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
第16図	6	1号溝状遺構	高台付椀	底部					5.8	やや不良	橙色 5YR7/6	浅黄橙色 7.5YR8/6	2㎜前後の砂粒含む	風化著しい
〃	7	〃	〃	〃					5.5	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/6	3㎜前後の砂粒含む	〃
〃	8	〃	〃	高台					8.9	〃	橙色 7.5YR7/6	にぶい橙色 10YR7/4	〃	〃
〃	9	〃	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ			7.1	良好	浅黄橙色 7.5YR8/3	浅黄橙色 7.5YR8/3	2㎜前後の砂粒含む	風化
〃	10	〃	〃	〃		〃				〃	橙色 5YR7/8	黄橙色 7.5YR8/6	〃	風化著しい
〃	11	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃			7.8(推定)	〃	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	〃	風化著しい
〃	14	2号溝状遺構	〃	〃						〃	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	3㎜前後の砂粒含む	
〃	16	3号溝状遺構	小皿	底部	ヨコナデ	ヨコナデ			6.4(推定)	〃	にぶい橙色 7.5YR7/4	橙色 7.5YR7/6	2㎜前後の砂粒含む	糸切り底
第17図	18	4号溝状遺構	坏	胴部～底部	〃	〃				〃	浅黄橙色 7.5YR8/6	浅黄橙色 7.5YR8/4	〃	
〃	19	〃	〃	胴部～底部	〃	〃			7.4	〃	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	〃	底部荒い仕上げ
〃	24	5号溝状遺構	高台付椀	口縁部～胴部	〃	〃				〃	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	〃	
〃	25	〃	〃	胴部						やや不良	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/6	〃	風化著しい
〃	26	〃	〃	高台						〃	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	〃	〃
第20図	1	1号掘立建物	坏	胴部～底部					4.0	〃	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	〃	風化著しい
〃	2	〃	〃	〃					5.4	〃	浅黄橙色 7.5YR8/6	橙色 5YR7/6	〃	〃
〃	3	〃	〃	口縁部～底部	ヨコナデ	ヨコナデ		1.7		良好	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	〃	
〃	4	〃	〃	胴部～底部	〃	〃				〃	にぶい橙色 5YR7/4	にぶい橙色 5YR7/4	〃	
〃	5	〃	〃	口縁部～底部	〃	〃	13.4(推定)	2.9	6.8(推定)	〃	にぶい橙色 5YR7/4	にぶい橙色 5YR7/4	〃	
〃	6	〃	高台付椀	高台	〃	ヘラ磨き				〃	黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	〃	内黒（黒色）土器
第21図	1	柱穴	坏	胴部～底部	〃	ヨコナデ			4.8	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	〃 ・白雲母混入	
〃	2	〃	〃	胴部～底部	〃	〃			6.1	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	橙色 5YR7/6	〃	スス付着
〃	3	〃	〃	〃	〃	〃			6.6	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	3㎜前後の砂粒含む	荒い仕上げ
〃	4	〃	〃	〃	〃	〃			6.0	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/3	2㎜前後の砂粒含む	風化著しい

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	部位	調整 外面	調整 内面	法量 口縁部径	法量 器高	法量 底部径	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
第21図	5	柱穴	坏	完形	ヨコナデ	ヨコナデ	9.6	2.3	4.8	良好	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/3	2³⁄₄前後の砂粒含む	
〃	6	〃	〃	脚部～底部	〃	〃			4.4(推定)	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	〃	
〃	7	〃	〃	口縁部～底部	〃	〃	12.4	4.0	5.9	〃	にぶい橙色 5YR7/3	にぶい橙色 5YR7/3	〃	
〃	8	〃	〃	〃	〃	〃	11.7	4.0	5.6	〃	にぶい橙色 5YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	〃	
〃	9	〃	高台付椀	高台	〃	〃			7.6	〃	にぶい赤褐色5YR5/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	〃	指押圧痕
〃	10	〃	〃	〃	〃	〃			6.4	〃	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	〃	スス付着
〃	11	〃	〃	胴部		ヘラ磨き				〃	浅黄橙色 7.5YR8/6	黒褐色 10YR3/1	3³⁄₄前後の砂粒含む	内黒土器
〃	12	〃	小皿	口縁部～底部	ヨコナデ	ヨコナデ	9.3(推定)	2.0	6.4(推定)	〃	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	2³⁄₄前後の砂粒含む	
〃	13	〃	〃	〃						〃	灰褐色 7.5YR6/2	にぶい橙色 7.5YR7/3	〃	
〃	14	〃	〃	底部		ヨコナデ		2.0		〃	浅黄橙色 7.5YR8/6	浅黄橙色 7.5YR8/6	〃	糸切り底
第22図	1		〃	完形	ヨコナデ	〃	10.5	2.0	6.1	〃	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	〃	
〃	2		〃	〃	〃	〃	10.5	2.2	5.9	〃	浅黄橙色 10YR8/4	浅黄橙色 10YR8/4	〃	
〃	3		〃	〃	〃	〃	10.5	1.8	6.1	〃	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	〃	
〃	4		高台付皿	口縁部～底部			11.3	2.3	6.8	やや不良	浅黄橙色 7.5YR8/6	浅黄橙色 7.5YR8/6	〃	風化著しい

ま　と　め

日高正晴

このたび発掘調査した上宮第３遺跡は、古い由緒をもつ三宅神社の、すぐ後背地に所在しているので、特に、神社との関連で特殊遺構などの出現というようなことも考えられた。

調査結果は、予期した通り10本の溝状遺構、および10基の土坑、それに掘立柱の建物跡などが確認されたが、さらに関心がもたれたのは、５号溝状遺構と７号溝状遺構の間の平坦な基台面に、四列にわたり、柱穴列が柵状につくられていたことである。また、この遺跡の全面にわたって約850個の柱穴状遺構が認められたことも、それなりに、この遺跡の意味する歴史性を示唆しているように思われる。

ところで、平成２年の９月から10月にかけて、同じく三宅神社の北、約100ｍの場所につき、事前調査を行った。そして調査の結果では、14本の溝状遺構と３ケ所に長方形土坑が確認された。この両者の調査で相違していることは、今回の方が、柱穴状遺構などが極めて多く、また出土遺物も、土師器などを主として、かなり出土したことである。

それでは、ここで三宅神社の歴史につき、その概要を述べてみたい。まず、ご祭神は、天孫降臨伝承にゆかりのある天津彦火瓊々杵尊を奉祀してあるが、鎌倉時代初頭の建久８年に編集された『日向国図田帳』には、「福野宮神田廿五町」とあるので、この神社の創建はかなり古い時代まで溯ると推定できる。

また、この三宅神社は、西都原古墳群内の象徴的墳墓としての男狭穂塚、女狭穂塚に対する祭祀行事を執り行ってきたので、その信仰儀礼は、特に、荘厳なものであった。そのようなことからして、この神社の年間の祭典は97回に及んだとある。その中でも、６月夏至の天孫降臨祭、８月15日の国家安穏祭、それに10月１日と11月初卯の日の山陵祭は、中世期における三大祭といわれてきた。

ところで、郷土の先学、児玉實満翁は、その著書、『笠狭大略記』の中で、この三宅神社一帯の地を「笠狭御崎」の本源地にあてている。

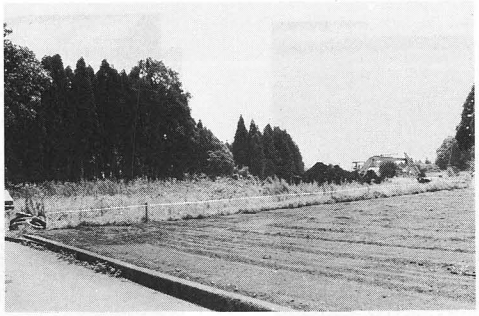
このような観点に立ってこの上宮第３遺跡を考察した場合、四列の長い柱列遺構の存在など、極めて祭祀儀礼的な遺構と考えられる。古くは、この遺跡のかなりの地域は、神社の境内に含まれていたものと思う。この柱列遺構には、ほとんど遺物は出土していないが、もし

かすると、多量の土師器を出土した１号土坑には、祭祀行事に使用した祭器としての土師器が、終了後に、この土坑内に入れられたものかもしれない。いずれにしても、この遺跡からの出土品は、大部分、土師器であるか、その中でも高台付土師器が比較的多かったのは、年間に100回近い祭祀儀礼行事に使用された祭器としての土師器が、その後、この地に遺存したものと思われる。２軒現われた掘立柱の建物遺構にしても、恐らく、三宅神社に関連があるのではないかと思われる。なお、上宮遺跡（上宮２号遺跡）でも存在し、また、今回も発見された数多くの溝状遺構が、何の目的で掘込まれたのが、さらに検討してみる必要がある。

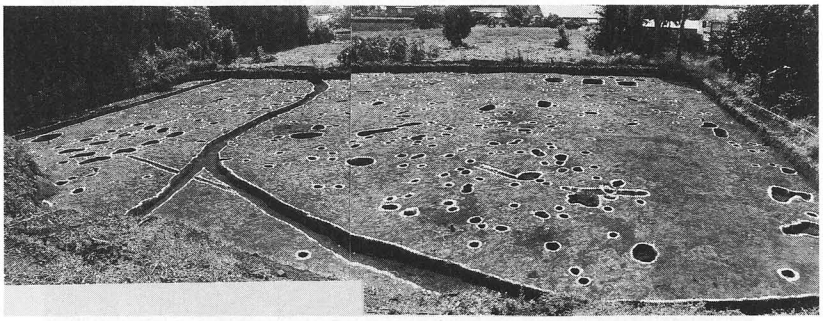
ところで、この遺跡の年代であるか、主として、平安末期頃から中世期前半頃の祭祀遺跡とみることができるが、その場合、三宅神社の祭祀儀礼に関連するものとみなされる。

図　　版

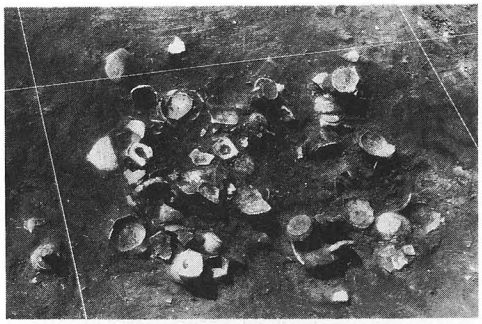
図版 1



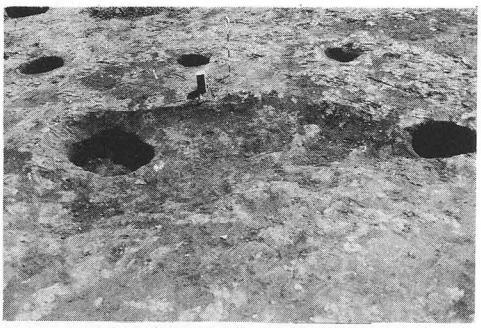
上宮第 3 遺跡近景



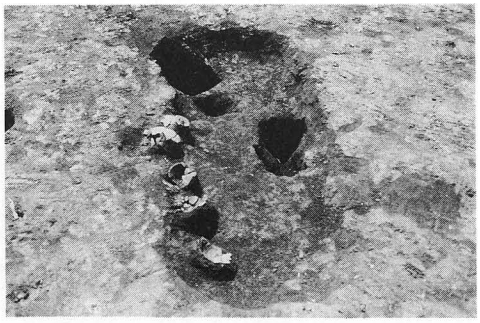
調査地南側遺構分布状況



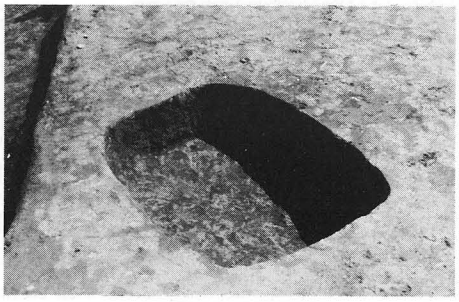
1 号土坑遺物検出状況



1 号土坑検出状況



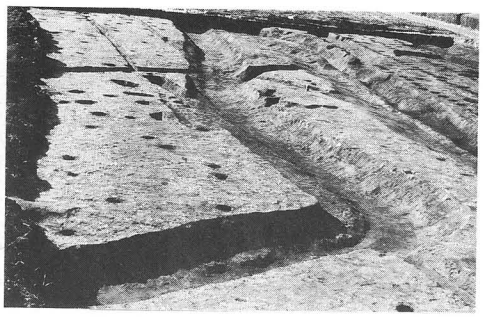
2 号土坑検出状況



3 号土坑検出状況

図版 2

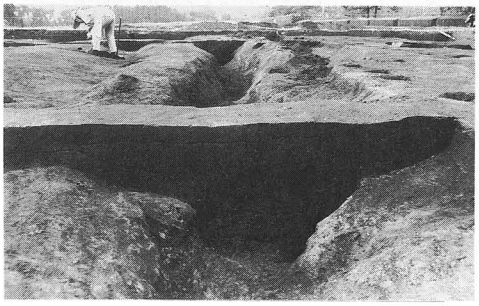
1 号溝状遺構検出状況



2 号溝状遺構検出状況

調査地北側遺構分布状況（南東部より）

4 号・5 号溝状遺構内配石検出状況



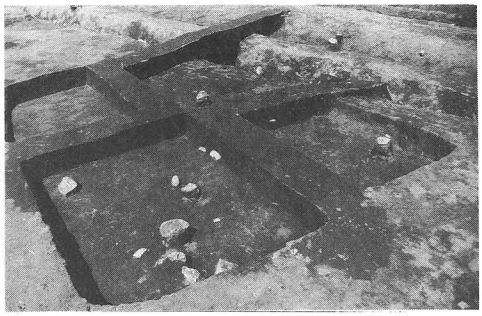
5 号溝状遺構土層検出状況

調査地北側遺構分布状況（北西部より）

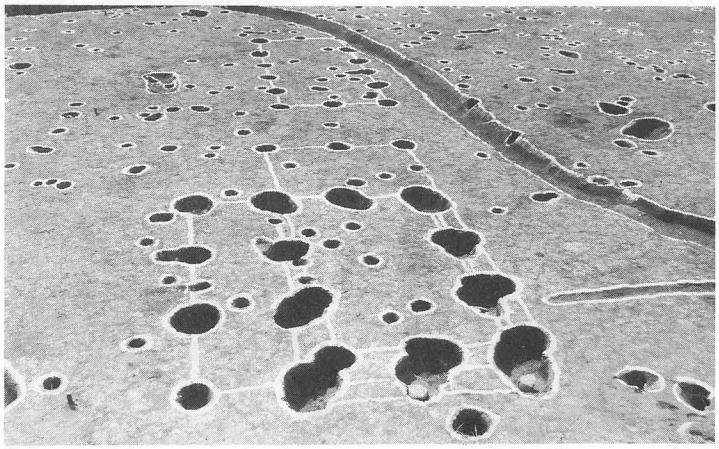
7 号・8 号溝状遺構検出状況

図版３

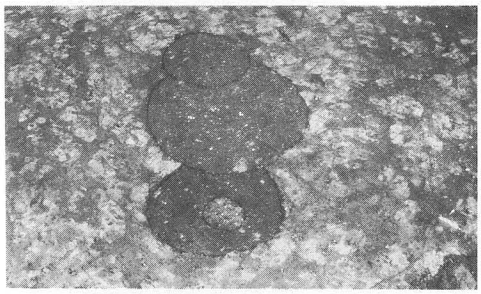
２号・９号・10号溝状遺構検出状況



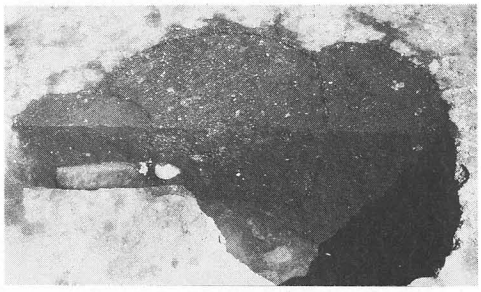
弥生時代住居跡検出状況



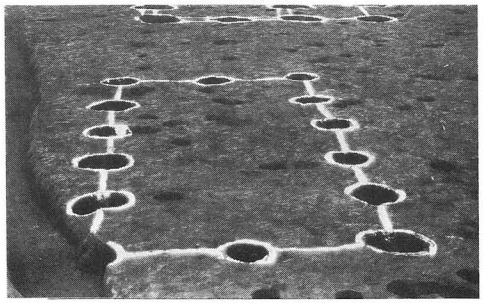
１号・２号掘立柱建物跡検出状況



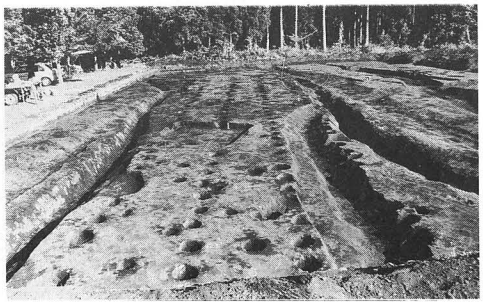
１号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ12）



１号掘立柱建物跡柱穴（Ｐ２）検出状況



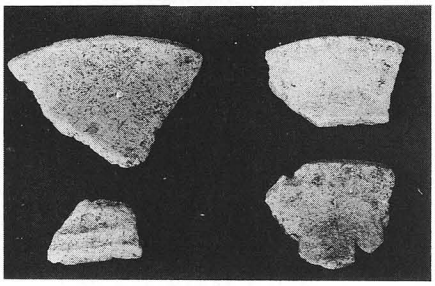
２号掘立柱建物跡検出状況



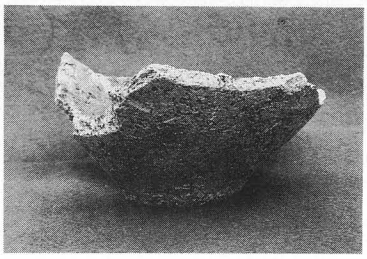
柱列（柵列）状遺構検出状況

図版 4

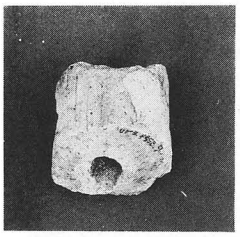
弥生土器



①～④



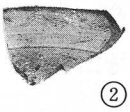
⑤



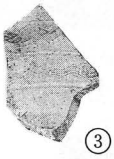
⑥

須恵器

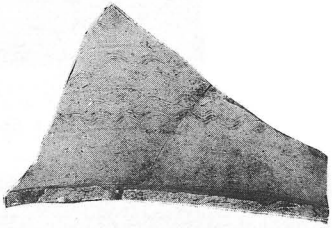
①



②

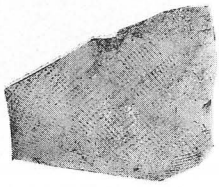


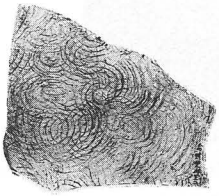
③



④

⑤





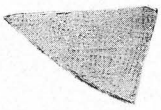
⑥

⑦

⑧

⑨

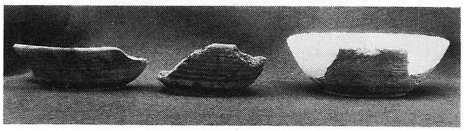
⑩



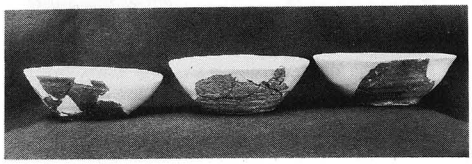
⑪

図版５

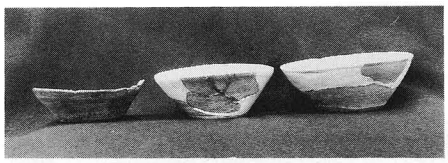
１号土坑



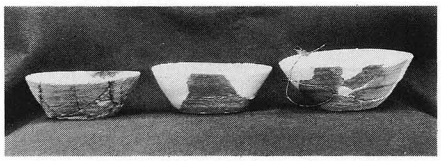
①～③



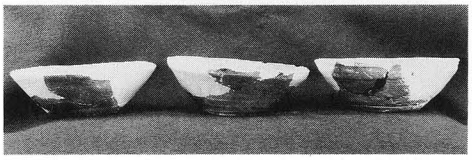
④～⑥



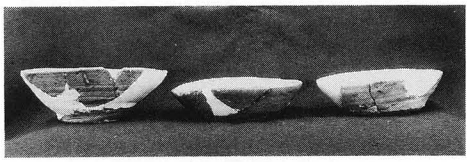
⑦～⑨



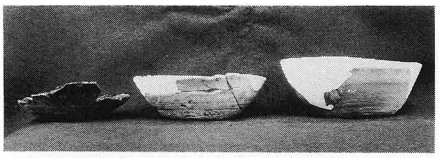
⑩～⑫



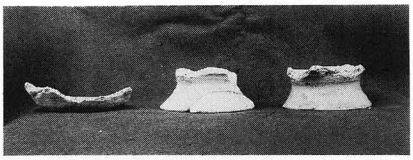
⑬～⑮



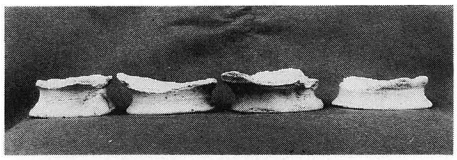
⑯～⑱



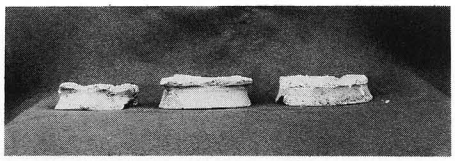
⑲～㉑



㉒～㉔

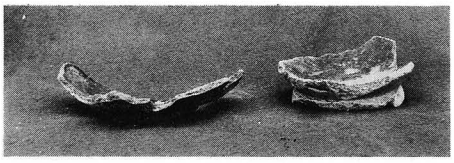


㉕～㉘



㉙～㉛

㉜

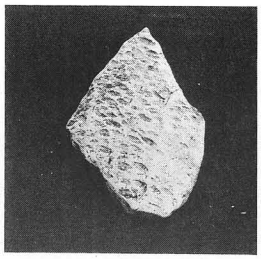


㉝・㉞

図版 6

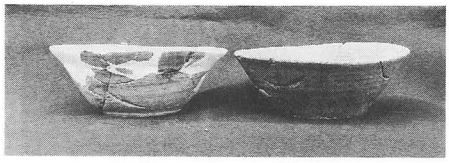
㉟

㊱

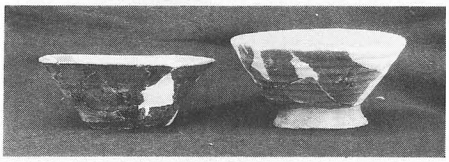


㊲

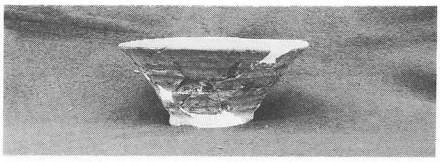
2 号土坑



㊳・㊴

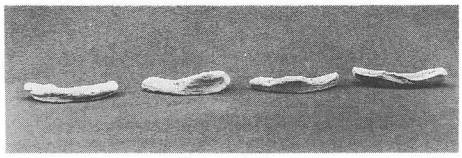


㊵・㊶

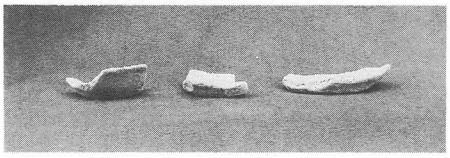


㊷

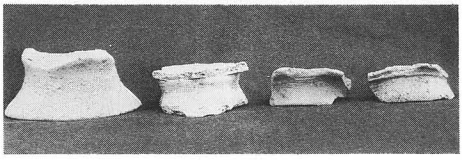
1 号溝状遺構



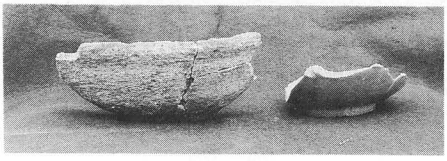
①～④



⑤～⑦

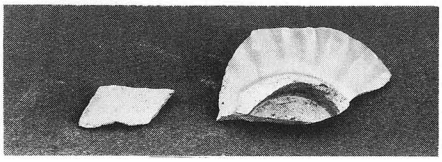


⑧～⑪



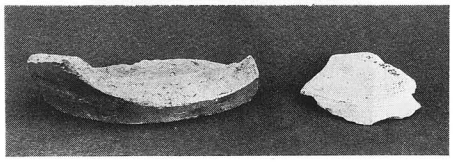
⑫・⑬

2 号溝状遺構



⑭・⑮

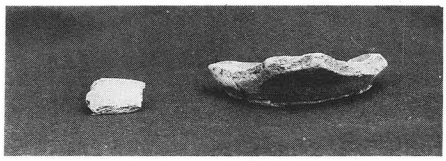
3 号溝状遺構



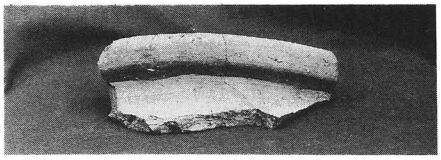
⑯・⑰

図版 7

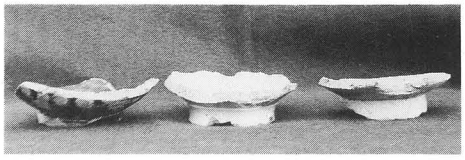
4 号溝状遺構



⑱・⑲

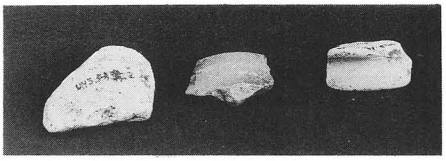


⑳



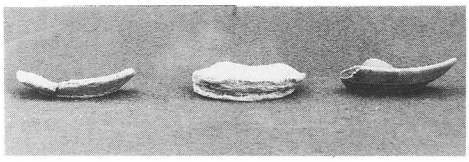
㉑～㉓

5 号溝状遺構

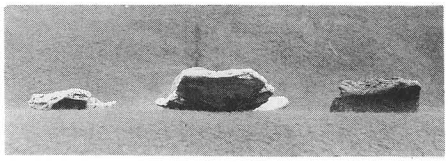


㉔～㉖

1 号掘立柱建物跡

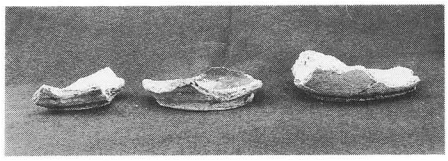


①～③

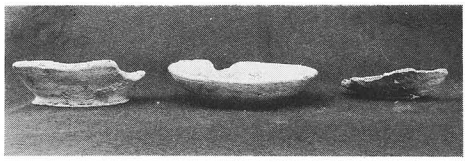


④～⑥

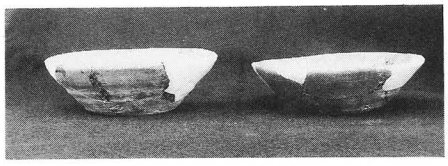
柱　穴



①～③

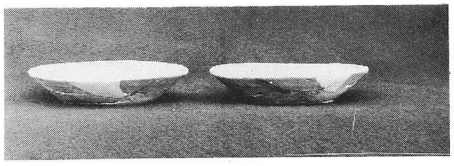


④～⑥

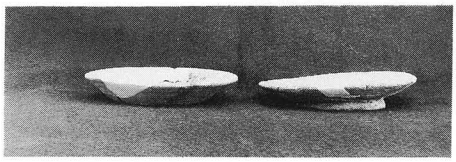


⑦・⑧

土師器



①・②



③・④

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書　第19集

平成５年３月25日発行

編集発行　西　都　市　教　育　委　員　会
印刷所　な　か　む　ら　印　刷　所